

ナザリックのお姫様

この世すべてのアレ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

モモンガの娘として設定されたNPCの話。

※アニメ版を元に執筆しています。

目次

モモンガ生誕祭	独白
支配者の“冠”	
崩壊	
リ・エスティーゼ王国編	
冠無き墳墓	
待ち続けた子供の話	
戦士長ガゼフ・ストロノーフ	—
周辺国家最強 対 威光の主天使	—
68	II
59	I
47	47
36	36
27	27
19	19
10	10
1	1

始動	忍び寄る魔の手							
	クレマンティーヌ、死す	I	—					
	クレマンティーヌ、死す	II	—					
	冒險者モモンとクローネ							
	カルミアを飾る茶会							
ゲヘナⅡ	誘拐							
ゲヘナⅠ								
疾風走破								
対								
鋼の執事								
150	135	120	109	99	87	78		



# 独白

## モモンガ生誕祭

「モモンガさん！」

「お誕生日！」

『おめでとう〜〜!!!』

ギルメンの掛け声でクラッカーが鳴り、色とりどりの紙吹雪がキラキラと玉座の間に降り注ぐ。

黒を基調としたナザリック大墳墓に合う華やかながらシックな飾り付け。目の前に置かれたケーキのオブジェクトはロウソクと沢山の果物、俺の名前が書かれたプレートで彩られている。本物と見まごう精巧さに製作者の本気を見た。

どうやら今日は俺、モモンガこと鈴木悟の誕生日……だつたらしい。正直言うと完全に忘れてた。

最近は仕事が忙しくて日課を済ませるだけだったが、ペロロンチーノさんからレイド戦の誘いがあつてナザリックに来てみたらこの通り。

アインズ・ウール・ゴウンのメンバーが勢ぞろいして俺の誕生日会を用意してくれていたんだ。

「まさか自分の誕生日忘れるくらい忙しいなんて思わなかつたな……時間大丈夫ですか？ さつきから固まつてますけど」

「だい、じょう、ぶでず……！」

「うわめつちや涙声」

感極まつた俺にペロロンチーノさんが背中をさするエモートをしてくれた。

「ちよつと愚弟／モモンガさん泣かせないでよ／」

「いや感動してんだろう見ても、本当に泣いてたとしても俺のせいじゃな」「発案はあんたでしようが！」

「ぐほオ！」

ぶくぶく茶釜さんのたいあたりで隣にいたペロロンチーノさんが吹っ飛んでいった。それを見たギルメンが「またやつてるよ」とゲラゲラ笑らい、顔から落ちたペロロンチーノさんに声をかけている。

俺もつられて笑つていると、弟にトドメを刺しに行つた茶釜さんと入れ違いで白銀の鎧が近づいてきた。

「ははは、ぶくぶく茶釜さんも素直じやない。発案者こそペロロンチーノさんだが、ケー

キと飾り付けは彼女がブループラネットさんたちに頼んで用意したんだよ」

「そなんですか!」

ギルドが誇るワールドチャンピオン、たつち・みーさん。本人が言わなかつた功績をそつと伝えてくれる面倒見の良さは、現役警察官なのを思い出させる。

皆にもだけど特にお礼を言わなくては。土下座のエモートを片手で確認していると、たつちさんが咳くように口を開いた。

「それに、泣くのはもう少し後にとつておいたほうがいい」

「? それってどういう……?」

意味がわからず聞こうとしたが、餡ころもつちもちさんの拍手に遮られる。

「はい皆ちゅうもくく! ちょっとぐだつたけどプログラム通りやるよ!」

(プログラムなんてあるのか、本格的だなー)

関心する俺に気付かず誕生日会は進んでいく。餡ころもつちもちさんからバトンタッチされた茶釜さんが俺に向かつて話し始めた。

「おほん。本日はお日柄もよく絶好のサプライズ日和。ケーキは食べられないけど後で私室に移しておるので、ブループラネット以下モデリング班の汗と涙の結晶をゆつくり味わつてね」

「仮にもケーキなのにその言い方どうよ」

「うるさい！ そして最後に、皆からプレゼントがあります！」

「えつ」

ギイと玉座の間の入口が開いた。いつの間に出ていたのか、さつきまでここにいたウルベルトさんが扉を開けて入つてくる。その後ろに人影が見えるが、ウルベルトさんに隠れて誰なのか分からぬ。

コツコツとこちらに歩いてくる2人。いつの間にか他のギルメンは道を作るようにならして、同じギルドに所属していながらマイペースなメンバーが多いウチでは異様な光景だ。

「設定考案、タブラ・スマラグディナ、ウルベルト・アレイン・オードル」

茶釜さんがまるで何かの式典のような厳かな声で名前を読み上げる。口を挟める雰囲気ではなかつたので、慌てて背筋を伸ばした。

「キャラクター・デザイン、ペロロンチーノ、ホワイトブリム」

ギルメンが作った花道を蹄と靴の足音だけが静かに響く。

「装備提供、やまいこ」

「ビルド考案、ふにつと萌え」

並んでいるやまいこさんとふにつと萌えさんが、こちらを見て小さく手を振ってくれた。

「カンパ＆レベリング班、たつち・みーとアインズ・ウール・ゴウン一同！」

ウルベルトさんは俺の目の前に来るとそのまま右に曲がり、1人分空いていた列の先頭入っていく。残つたのはウルベルトさんの後ろにいたアバター。

それは小さい女の子だつた。

顎まで切りそろえられたサラサラの白い髪。その下から薄い青と白をツギハギした肌が覗き、瞳はぼつかりと浮かぶような赤色をしていた。色こそ冷ややかで禍々しいが、くりくりと大きい目が困つたような顔でこちらを見上げている。

服装は丈を膝下まで短くしたような黒いウエディングドレスで、頭には青い薔薇の力チューシャと、ドレスと同色の細かい刺繡が施されたベールが垂れている。手には白い剣を大事そうに抱いていた。

闇に祝福された花嫁のような、喪に服した孤独な少女のような、不思議な女の子だ。

（めちゃくちゃ可愛い）（お姫様をゾンビにしてみたらこんな感じかなあ）（でも嫁に出るには小さくないかなあ）とぼんやり考えてから、そういうえば茶釜さんはなんて言つてたつけ？と思いつ出す。

「ということでこちら、”モモンガお兄ちゃんが人間だった頃に死に別れたけどなんとか復活させた娘ちゃん（N.P.C.）”でーす！」

「な  
なんだつてえええ——?!」



死の支配者モモンガが人だつた頃、戦乙女の妻と一人娘がいた。しかしながら運命の悪戯か、未曾有の天災に巻き込まれ無常にも引き離されてしまう。友の過去を憂いた至高の支配者達は各地を探索し、幸運にも娘の亡骸を発見した。それを繋ぎ合わせ魂を吹き込んだのが現在の姿である——』

『そういう訳で彼女が俺達からの誕生日プレゼント』

「俺に生き別れの娘がいるなんて初耳でしたよ……」  
大草原で埋め尽くされるなか、ひっくり返った俺にタブラさんが説明してくれた。

この子はギルメンが協力しあつて『ナザリックのお姫様』として作り上げたんだそ

う。  
ナザリックのコンセプトと俺のロールの親和性に着目し、天啓を得たタブラさんとウ  
ルベルトさんが設定を作つて悪ノリに悪ノリを重ねた結果できあがつたという。  
「つつても俺はほとんど相槌係。俺よりもペロロンチーノとホワイトブリムさんが口出

てたし」

ウルベルトさんがどことなく居心地悪そうにソワソワしていた。隣にいるタブラさんが意味ありげに笑顔の感情アイコンを浮かべている。

「まあ。モモンガくんへのプレゼントだけど、居てくれたら嬉しい性能を目指したからナザリックのお姫様に違いないよ」

「全弱体無効の汎用支援型ヒーラーでしたつけ」

「そうそう。やまいこさんが装備くれなかつたら実現できなかつたけどね」

やまいこさんとぶにつと萌えさんがうんうんと満足そうに頷いた。

「ちょっと待つた！ 性能抜きにしてもちろんとお姫様してますでしょ！ このヴィジュアル！」

「清楚系目指して頑張ったよ（グツ）」

「ハイハイ、頑張った頑張った」

「ちゃんと好みもりサーチしてホワイトブリムさんと打ち合せしたのに、適当にあしらわれる俺……あまりにも報われない……」

「フェチズムは理解されるの難しいからしようがないね……」

「好みなんて話しましたつけ、記憶にないんですけど」

「ほら、ホワイトブリムさんがオススメしてくれた『むちむち戦乙女グ「ウオ

アアアアアーーー!!」「ゴフウツ」

言い終えるよりも早く思い出した俺のアンデッドパンチが喰る。返す手でよろめくペロロンチーノさんの胸ぐらを掴んで勢いよく引き寄せた。

「酒の席の話は、お互い心の中でしまつて置くのが暗黙の了解だつたと思うんだが!!」「ゴメン、ユルシテ、シヨウガナカツタ」

完全に取り乱して負の接触のO p o i n tダメージをポップさせ続ける俺の肩に、ポンと手が置かれた。振り返るとウルベルトさんがなんとも言えない笑顔の感情アイコンを浮かべていた。

「皆、全部知つてる」

「俺は絶望した。」

「さて、モモンガさんが泣いた（笑）ところで誕生日会のプログラムは終わり！これは最初にやるべきだつたけど、今やるよ！」

「ギルドマスター・モモンガの生誕と、AINZ・ウール・ゴウンの繁栄を祝つて——乾杯！！」

『AINZ・ウール・ゴウン万歳!!』

いじけた主役を差し置いてワイワイと酒盛りを始めたギルメン達を尻目に、気分を切り替えるために息を吐いた。

自分の性癖を暴かれたショックはまだ引きずっといる。いや、かなり引きずっといる。けれど皆が俺のために考えて祝つてくれたことに違いはない。

早くも酒が入ったギルメンに絡まれた、物言わぬ自分の娘を見る。設定こそ自分の縁者になつてゐるが、本当はアインズ・ウール・ゴウンにとつての娘なのだろう。娘を困む皆を見ているとよく分かる。

……頑張る理由が出来ちゃつたな。苦労も多かつたギルドの管理が急に楽しみになつてきた。

でもまずは、冷蔵庫にある缶ビールを持つてきてあの輪に混ざつてから頑張ろうと思う。

どうか、この楽しい日々が続きますように。

## 支配者の「冠」

「はあ、気になるけどそんなすぐには思いつかないし、そろそろレベリング行くか」誕生日会から数日後。俺は娘の隣に座つて装備の確認をしていた。

その後、飲みながらこの子のステータスと育成状況を教えて貰つた。

種族はアンデッド。<sup>ブレイブ</sup>職業はクレリック等の信仰系を中心に、世にも珍しい隠し職業の勇者。<sup>ブレイブ</sup>ヒーラーとしてほとんど経験値を振つてるのでレベル5で止まっているが、確かに味方への支援スキルが優秀……だつたはず。

タブラさんの強い希望で取得したと言つていたが、お姫様で勇者などころがギャップ萌えのツボを押すのだろうか。俺にはギャップ萌の属性はないからなあ。

ヒーラーとして育成はしてあるが、カンストまではあえて進めなかつたらしい。「娘なのだからモモンガさんにも育てる時間あげたかつた」とぶにつと萌えさんは言つていた。

なので今は80レベルで止まっている。

(80台のレベリングつて何処に行けば良いんだつたか……しばらく連続でロストする

ことも無かつたから忘れてるなあ。パワーレベリングするには少し心もとないし）

これまで通りなら拠点N P Cを育てるのにレベリングは必要ない。

しかし最近になつて拠点を所有するギルド向けのアップデーターがあり、作成した拠点N P Cを同時に5人まで外に連れ出せる『連れ歩き機能』が追加された。

最初に連れ出してから一定の期間が設けられ、一部高難易度バトルとP v Pを除く全ての戦闘に参加する事が出来る。

ただし参加できるのはカンストするか、期間が終わるまでの間だけ。その後は『連れ歩き機能』を使っても本当に連れて歩けるだけらしい。

到来のレベルの振り分けが無くなつた訳ではないので、これは一部のコアなユーザー向けに作られたお遊び機能だ。

もしN P Cを連れ歩いてる時に拠点が制圧されても自己責任、という注意書きには少し運営に殺意が湧いた。

レベリングの話に戻ろう。

高レベルプレイヤーの戦闘で得た経験値で、低レベルなプレイヤー（またはN P C）のレベルアップを高速化するパワー・レベリングは一般的な方法だ。

しかしユグドラシルでの異形種はなにかと狙われやすく、レベリングをするにも一苦労。いくら俺が最上位の『死の支配者<sup>オーバーロード</sup>』を取得していようが格上なんてごまんといるし、

同格のプレイヤーに囲まれたらひとたまりもないだろう。

追加された機能の中には、"PVP"には参加出来ないがPTリーダーが口ストするとNPCも口ストする"なんて仕様もあった。

生まれて間も無い娘にそんな苦労はさせたくない。一端の父親になつた気分で腕をまくつた。

コンソールでウェブサイトを開き、それらしい情報を漁つて記憶を掘り起こしていると、たつちさんから入室許可を求める通知が来た。なんの用だろう？

「こんばんは、モモンガさん。日課が終わつてないメンバーで集まつてゐるんだが一緒にどうだらう？」

「あー、すみません。俺はもう終わつて、これから娘のレベリングに行くんです」

「ああ、娘ちゃんの」たつちさんの嬉しそうな声から、娘を気に入つてることが伝わつてきてちよつとニヤニヤした。たつちさんのちゃん付けてリアだな。

「人手は足りてるのかい？」

「いや、実は——」

「ぶつと萌えさんの気遣いを理由に誰も誘つてない事を伝えた。

「それなら俺のセバスを貸そう

「いいんですか？」

「もちろんだ。困っている友を助けるのは——いや、それもあるが、俺はあまり使つてや  
れてないからな」

「ああ……なるほど。それじゃあ遠慮なく」

申し出を有難く受け取り、さっそくマスター・ソースを開いた。するとまた入室許可の  
通知が来たので反射で承認してしまつたが、名前を見て「しまつた」と少し後悔する。  
「モモンガ、ちょっとダンジョンに用事が——あ？」

「……ウルベルトさん」

最高に空気が重い。犬猿の仲である二人を力合せた後悔は少しどころじや足り  
なかつたかもしない。睨み合う二人に冷や汗を流しつつ、空気を変えようと娘のレベ  
リングの話をウルベルトさんにもした。

「へえ、じゃあ俺のデミウルゴスも連れて行けよ。盾にはなるし魔法の練習相手にも丁  
度いい」

「ほう……」

「何か文句でも？　人を人とも思わない悪魔と自分のN P Cを同じにパーティに入れた

「くないとか？」

「いや、娘ちゃんのレベリングが安全に行えるならそれが良いと思う」

「…………」

「…………」

口を挟む隙もなく、火花が散る睨み合いにレベルアップしてしまった。レベリングはしたかつたけどこれは違う。

オロオロする俺に気付いてくれたのか、幸い睨み合いは長く続かず、ウルベルトさんが諦めるようため息をついてこちらを向いてくれた。

「そういえば娘としか呼んでないけど名前はまだ決まってないのか」

「……迷ってて」

「ネーミングセンスないもんな」

「ウツ」

「ここ最近悩んでいたことを清々しいくらいにバツサリと切り捨てられた。

「だから俺は皆が付けた名前が良いくて言つたじやないですか……思いついた名前は全部、茶釜さん達に『正直ナイワー』で却下されるし」

「自分の少ないボキャブラリーで決めようとするからだろ。みんな色々調べてるんだから見習えよ。青い薔薇つけるから青子とか、モモンガと似てるからムササビとか、適当な名前付けられる娘の気持ちとナザリックのコンセプトを考えろ」

「モモンガさんには悪いが、ムササビは俺もどうかと思う……」

ウルベルトさんの容赦ない指摘と、たつちさんの控えめな一言がグサッと突き刺さ

る。普段、仲の悪い2人の意見が一致してゐる事実がなお辛い。分かつてゐるが俺の心はもう傷だらけだ！

——そう、悟は困つてゐた。悟には名前の善し悪しが分からぬ。自分のプレイヤー名も適当に付け、ギルメンと遊んで暮らしてきた。

飲み会ではタガの外れた仲間にネーミングセンスのなきをネタにされ、メロスもかくやと言わんばかりの苦惱を仕事で誤魔化してきたが、そろそろタイムアップか。「所詮はデータに過ぎないかもしね。けどせつかくできた娘なんだ、この子もお父さんから名前を貰つた方が嬉しいさ」

「デミウルゴスはいつでも貸すからじっくり考えろ」

入つてきた時の険悪な様子とはうつて変わり、二人揃つて退出して行つた。

「はああ……たつちさんもウルベルトさんも簡単に言うよなあ、もう」

俺のセンスはパンドラズ・アクトーで限界なんだが、いつまでも『No Name』でいさせるのも可哀想だとは自分でも思つてゐた。

観念してモモンガを椅子に座らせ、俺も座つての椅子の上で大きく伸びをする。そのままひざ掛けに寄りかかつて頬杖をつき、娘を見つめた。

モモンガの生き別れの娘でナザリックのお姫様。母親はモモンガが愛した女、正確にはちょっとエッチな漫画の主人公がモデル（タブラさんの設定では失われた神話に登場

する戦乙女) だけど……この話を深追いするのはやめよう。傷が開く。

そしてなによりギルドメンバー全員で作つた子供。俺抜きとはいえ、ギルドを上げて作つたものなんてスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン以来だ。他のギルドの人間からすればただのN P Cだが、ナザリックにとつてはワールドアイテム級のN P Cに違いない。

そんな子を本当に俺が貰つていいのか。遠慮する気持ちが無いと言つたら嘘になる。正直に言つて、俺はたつちさんの推薦があつたからギルド長なんてものやつているだけで、皆をまとめる資格やら資質やらがある訳じやない。やつていることは雑務だし、ロールプレイのためにビルドを構築したのもあって戦力としても抜きん出たものは無く、ふにつと萌えさんのように戦術を立てられるわけでも、ペロロンチーノさんのようなムードメーカーでもない。どこにでも居る普通のサラリーマンだ。

(――待てよ、そんな俺に皆がここまで心を割いてくれて、その結果創り出されたものならギルド長の証と言つてもいいんじやないか?)  
ハツと閃いた俺は椅子から背を浮かせた。

忘れないうちにブラウザで翻訳事典を開き、目当ての単語をタップして翻訳結果を指で追つた。

「英語ではクラウン……ドイツ語では……“クローネ”か。うん、女の子っぽくていい

な。それにパンドラズ・アクターも俺にとつて子供みたいなものだから、ドイツ語が由来なのも良い』

クローネ。その名前が意味する言葉は『冠』。支配者の証を象徴するにはこれ以上なく打つて付けだ。

『ナザリックの支配者として君臨するモモンガにとつて、娘こそが己が地位を示す唯一無二の宝である——』なんて、寸劇ロールプレイでもしたくなる設定じゃないか？

我ながら良い名前だと自画自賛するのは、今だけ自分に許すことにしよう。

それにしてウンウンとあんなにも悩んでいたのが嘘のように、あっさりと決まつてしまつて少し拍子抜けだ。俺が頭を痛めていた数日間は一体なんだつたんだ……

もしかしたら本当の敵はネーミングセンスではなく、皆への遠慮だつたのかも。

(だからといって自惚れるつもりはないさ。認めてくれた皆がいて初めて、俺はナザリックの支配者の冠を被れるんだ)

気を引き締め直してからプロフィールを開き、放置していた名前の欄を記入する。用が済んだコンソールを閉じると、俺と同じ赤い目がこちらを見ていた。

「これからよろしく、クローネ」

低い位置にある白い頭を骨の手で撫でても、クローネの表情は変わらない。それでも俺は良い名前がつけられて満足だつた。

皆には後で報告するとして、まずは発破をかけてくれたウルベルトさん達にお礼を言  
いに行こう。

名前を聞いたみんなの反応を想像しながら、クローネを連れて自室を後にした。

# 崩壊

俺がギルド長としての自分を認めてからしばらく、AINZ・ウール・ゴウンはギルドランク9位にまで登り詰め、ユグドラシルでも指折りの悪の異形ギルドとして有名になった。

ある時は、以前から嫌がらせを続けてくる敵対ギルドに堪忍袋の緒がブチ切れたギルメンが中心となり、綿密に練つた作戦でおびき寄せた相手ギルドのワールドアイテムを全て奪取。

とてつもなく腰が低い嘆願のメールをオープンな掲示板に貼り付け、見せしめにして悪らしく振舞つたり。

ある時は、未完成だったナザリックの全制作過程が終了し、完成を祝つて誕生日会以上のどんちゃん騒ぎ。その結果、過半数が二日酔いと寝坊で会社や家族から大目玉を食らつてPKする気も起きず、襲つてきた人間種を瀕死で済ませたり。

もつと個人的な出来事と言うなら、カツコイイと思ってたドイツ語から熱が冷めて、パンドラズ・アクターとクローネを見る度に顔を覆つて床を転げ回りたくなる衝動に襲

われるようになつた。死の支配者らしくない情けない話である。

クローネはともかくパンドラズ・アクターは頭のてっぺんからつま先まで、軍服で敬礼で、全体的にドイツなのが……あああ思い出しただけで恥ずかしい。

ちなみにクローネは期待通り便利な回復キャラとして育成を終えて「何故パーティに誘えないのか！」と回復を兼ねることもある主にタンク役のギルメンに泣いて縋りつかる程になつた。

奪取したワールドアイテム『聖杯』<sup>ホーリーグレイル</sup>を装備すれば更に万能なヒーラーとして活躍する自慢の愛娘だ。

ハロウインイベントで“人化の指輪”を持たせて人間の仮装をさせたら、妙にテンションの高いホワイトブリムさんが常に着けるように迫ってきたつけ。白い髪が映えるようにほんの少し褐色肌にしただけなんだけど……

振り返つてみると有名になる前とやつてることはあまり変わらないな。その方がユグドラシルでわざわざ異形種を選んだ俺達らしいのかも。

まだまだ語りきれないほどユグドラシルの思い出はたくさんある。

ザリツク侵攻戦』が一番だ。

あれはギルドのメンバーの誰もが忘れない出来ない戦いだつた。

俺達が作り上げたナザリツクの凄さをユグドラシル中に知らしめる絶好の機会。悪の異形ギルドとして最高のロールプレイが披露できるイベントだ。

まあ、開始早々、俺は王座の間に放り込まれて、待機していたギルメンと実況ライブを楽しんでいただけだつたりするんだけど……

攻め込んできたプレイヤーを各階層守護者とモンスター達が順番に迎え撃ち、虎の子のヴィクトイムで次々とログアウトしていく光景は圧巻だつた。結局王座の間で俺と対峙したプレイヤーはいなかつたが、過去に例を見ない大きな戦いを41人で乗り切つたことが誇らしかつた。

どれもこれも、目を閉じればつい昨日の事のように思い出せる。

そう、楽しかつた。楽しかつたんだ。きっと俺だけじゃない、皆も。

それが崩れ始めた切つ掛けはなんだつたのか。

最初の1人が引退した時は「リアルがあるから仕方ない」と引退するメンバーを惜しみながら見送つたことを覚えてる。

そこからまた1人、また2人と少しずつ辞めて行く人が増えた。のんきにも俺は残念に思うだけで、落ち込みながらも何処か樂観的でいた。

まさか全員が全員AINズ・ウール・ゴウンを捨てるはずがないと思つていたのだ。俺達の、栄光あるナザリツクを。

辞めたメンバーがいつ帰つて来てもいいように残つた人間で頑張ればいいと。

嫌な予感がしたのは、たつちさんが辞めると言つた時だ。

この時ばかりは流石に驚いた。本人の意思は固く、リアルの忙しさを知つていたから強く引き止めることは出来なかつた。申し訳なさそうに、でもこれまでの感謝を伝え、何処までも誠実なまま引退していった。

ワールドチャンピオンに上り詰めるほどやり込んでいた、あのたつちさんが辞める。そこからは早かつた。

また1人、また2人、また3人。俺は精一杯、快く見送つた。

元々オンラインゲームは金のかかる趣味だ。いくら社会人とはいえ付き合いで続けるほど安い娯楽じやない。それに、本人にはどうしようもない事情だつてある。辞めると決意した人を引き止める権利なんて誰にもないんだ。

ナインズ・オウン・ゴールからの付き合いだつた6人が特に別れを惜しんでくれたのは、不幸中の幸いとでも言おうか。

親友と言つてもいいウルベルトさん、ペロロンチーノさんも。

気付いたら1人になつっていた。

残つたのは見慣れすぎた装備と溢れるほどのアイテム。そして誰もいない広大なナザリック地下大墳墓。

ギルドの帳簿にはまだ3人残っていたが、オンラインのまま連絡がつくことは無かつた。

この頃、既にユグドラシルは“かつて絶大な人気があつたDMMO—RPG”というポジションにいた。運営が用意した未知なる冒険はそのほとんどが掘り尽くされ、イベントも焼き増しばかり。当然の流れだと言えばそうだろう。

1人になつてからも俺はログインし続けた。ナザリックの維持には金貨がいる。また誰かが攻略しに来て、俺達の場所を踏み荒らされるなんて耐えられない。

ソロでギルドの維持費を稼ぐのは大変だけど不可能ではなかつた。時間は必要だが単純作業は得意だ。

誰も居なくとも俺はナザリックが好きだから、頑張れる。

——なんて、いま思えば他にやることが無かつただけだ。リアルの俺は侘しくて、つまらない人間だったから。

生まれて初めて友達が出来て、リーダーに抜擢してもらえて、未知のダンジョンを皆で攻略して、誕生日を祝つて貰つて……それを思い出にしたくなくてみつともなく縋り付いている。

俺にとつてかけがえのないものがアインズ・ウール・ゴウンで、皆はそうじやなかつた。それだけの話だ。

でも、それでも、叶うなら皆ともう一度遊びたい。  
そう願うのは、間違っているのだろうか――

「…………夢か」

目が覚めるとナザリックの私室で突っ伏していた。

仕事から帰つて、ログインしたまま寝てしまつたらしい。やけに懐かしくて寂しい夢  
だつた。

「ふああ。インターフェース付けたまま寝落ちなんていつ以来だろう、しかも夢まで見る  
なんて」

インターフェースをずらして目を擦つて隣を見ると、クローネを立たせたままだつたの  
を思い出した。今日は俺の気分で人化バージョンだ。

さつきの夢の余韻が残つてゐるのか、なんとなく心細くなつた俺はいつもの様に白い頭  
を撫でる。

「クローネ、お前も寂しいよな……ごめんな、ずっと連れて行つてやれなくて。だいぶプ  
レイヤーも減つたし、たまには……」

――ということできちらら、『モモンガお兄ちゃんが人間だつた頃に死に別れたけどな  
んとか復活させた娘ちゃん』でーす！

クローネを紹介した時のぶくぶく茶釜さんの声が甦り、撫でる手が止まつた。

——まあ。モモンガくんへのプレゼントだけど、居てくれた嬉しさ性能を目指したからナザリツクのお姫様に違ひないよ

——まさか自分の誕生日忘れるくらい忙しいなんて思わなかつたな……時間大丈夫ですか？　さつきから固まつてますけど

「クソツッ！」

もう戻らないと分かつてゐる過去の記憶に苛立ちが抑えきれず、気が付くと机を殴つていた。

同時に自分の行動の馬鹿馬鹿しさに呆れて頭を抱える。

「は、何やつてんだろ俺。いくら話相手がいないからつてN P Cに話しかけるなんて……それにノルマ全然終わつてないのに連れ回してどうするよ」

「もう自室には来ないようにしてようか。特に意味があつた訳でもないし、寝る時間は確保しないとな」

まくし立てるように結論を出した後、チラツとクローネを見る。黙つたままこちらを見上げる幼い顔にさつき呆れた自分がまた出てくるのを感じた。

「……」めん、お前の顔見えてると思い出して辛いんだ

そう言い捨てて、俺は思い出から逃げた。

どれだけ物分りのいい振りをしても自分の心には嘘が付けない。誰も悪くないと分かつているけれど、向き合うのは辛かつた。

いつか、俺が受け入れる少しの間だけ、逃げたかった。



ユグドラシル〈Yggdrasil〉公式サイト

お知らせ掲示板

【サービス終了のお知らせ】

平素よりユグドラシルをご利用頂きありがとうございます。

DMMO-RPG『ユグドラシル〈Yggdrasil〉』は、予定通り2138年

■■■月■■■日をもちましてサービスを完全に終了致しました。

発売から12年ものご愛顧、誠にありがとうございました。

お客様には深く御礼申し上げます。

# リ・エスティーズ王国編

## 冠無き墳墓

サービス終了時刻の0時を回った後、ナザリック地下大墳墓はかつてない事態に直面していた。

大墳墓の主人モモンガが察知した異変——それは仮想が現実となり、ナザリックがユグドラシルではない別の世界に突如として転移した可能性。

そして守護者達の預かり知らぬところではあつたが、心を持たぬN P Cである彼らが意思を持ち行動していることも異変が起きている事の証明だつた。

偵察に出ていた執事長のセバスから報告を聞いたモモンガは、この事態に対応すべく守護者統括のアルベドを通じて招集した守護者達に防衛の強化を命令する。

そこで改めて忠誠心を確認し、終始支配者として振る舞いつつも内心では滝汗を流しながらその場を立ち去つた。

セバスがモモンガを追つた後も、残つた守護者達は興奮冷めやらぬ様子でモモンガの素晴らしさを語つていた。

ほとんどの守護者は死の王としてのカリスマに胸を震わせ、また上司として部下を労る優しさに感謝していたが……

「この大口ゴリラ!!」

「ヤツメウナギ!!」

モモンガという男に魅せられた女2人の仁義なき戦キヤツトフアイトい。猫のような可愛らしさとは程遠い罵りあいを繰り広げている。

容赦なくお互いの悪口を並び立てる姿に他の守護者は呆れて遠巻きにする始末。同じく傍観していたデミウルゴスは2人に念を押すため、思つたことを口にした。

「私としてはモモンガ様さえ宜しいのならどちらでも構わないがね。既にクローネ様といふお世継ぎは居るのだから」

ピタッと罵りあいが止まつた。気まずい表情でこちらを見る2人に、メガネを中指で上げてみせた。

「クローネ様は女性ですが権利は充分ある。まあ、慈悲深い御方だから我々がお守りする必要はあるにしろ……まさかとは思うが、その地位を脅かすつもりなら私にも考えがあるよ」

「右二同ジク」

「そ、そんなつもりないであります!」

「モモンガ様に愛して頂けるのなら、確かに子供は欲しいけどそれはそれよ」

本気で焦つてるよう見えるシャルティアとは対照的にアルベドは冷静だった。口には出さなかつたがアルベドはモモンガを愛しているのであつて、娘のクローネは眼中にない。むしろ愛するモモンガと他の女の愛の結晶なのだから、そこに向ける感情は推して知るべしである。

だからといってわざわざ仲間割れの原因にするほどでも無かつたが。

「それに！ このわたしがクローネ様を蔑ろにするはずがないでありんしよう！」  
「ん？ それはどういう意味——」

デミウルゴスが言い終わる前に、その場にいる全員はカツヒスポットライトで照らされたシャルティアの姿を幻視した。

簡単に言えば振り返った顔はそれほど輝いていた。よくぞ聞いてくれた、と。

「美の象徴であるモモンガ様のご息女であり、至高の御方々が手ずから蘇らせたあの玉体！ 純白の髪にお父上と同じ真紅の瞳！ 色の違う肌の縫い跡すら、退廃的で美しい！」

「確かにクローネ様はとつても綺麗なお方だよね」

「いや、多分あいつが言いたいことはそれだけじゃないと思う……」

なにかのスイッチが入つたシャルティアを見て、双子がコソコソと小声で話す。仰々

しい仕草で美と愛を語る姿はまるで舞台役者のようだつた。

「ああ、愛しのクローネ様。でもわたしにはモモンガ様が……！」ハツ、親子になればお風呂に入つて洗いつこもできるであります！ やつぱりモモンガ様に初めてを捧げてからクローネ様にもじつくり母として性の手解きを」

「いい加減帰つてきなさいこの変態！」

「フギヤッ！」

自分の世界兼趣味劇場を始めたシャルティアにアウラは拳骨を落とした。

フシューと排気しながら静かに憤慨していたコキユートスも口を挟む。

「不敬ダ、全ク不敬ニモ程ガアル。クローネ様ハ14歳デ身体ノ成長ハ止マッテイル。心モ未ダ幼イ。コノ爺ノ目ガ黒イウチニ、ソンナ不埒ナ真似ガ出来ルト思ウナ」

(コキユートスはこんな性格だったかしら、子供好きなのね意外と)

「アアン！ あんな美貌を前にして欲情せん方がおかしいわッ！ そういうコキユートスはどうなんでありんすか！」

「ヌ!?」

哀れ、武人コキユートス。シャルティアの性的な追求にしどろもどろになり、瞬く間に劣勢へと追い詰められた。止めるアウラの声もどこか遠くに聞こえる。

「はあ、なんだか冷めちゃつたわ。私もモモンガ様の素晴らしいところならいくらでも

言えるけど

「それは丁度いい。そろそろ私達に指示をくれないかね、アルベード」

「ぼ、僕も早くお仕事したいです」

「それもそうね。コキユートス、シャルティア、アウラ！ 指示を出すからそこまでよ！」

守護者達によるモモンガ様談義から脱線して暫く、やつと本来の仕事に取り掛かるはずだつた。

モモンガから緊急の〈メッセージ伝言〉が飛んでくるまでは。

時間は少し遡り、闘技場から立ち去つたモモンガは自室の前で立ち尽くしていた。や前かがみになつた背中からは哀愁が漂つてゐる。

(まさかこんな事になるなんて思いもしなかつた。最後だけでも会いに行けば良かつたのに……俺つて奴は本当に……)

骸骨の顔を手で覆い、自分の不甲斐なさを悔いた。

あの日、娘のクローネと会わなくなつてから1年も経つていた。ずるずると先延ばしにして、ついにはユグドラシルが終わるまで——正確には終わつてもなお、受け入れる事が出来ないでいる。

ゲームではただのデータの集合体だったが今は心を持ち、意志があるアンデッドとして今も部屋で待っているのだろう。

モモンガは後悔と罪悪感に押し潰されそうだった。アルベド達の忠誠心を見た後なのも余計に心を重くする。

(腹をくくれ、モモンガ！ 許してもらうためならなんだってしようじゃないか。待つ辛さは俺が一番良く知っているのだから！)

グツと骨の拳を握つて決心を固めたモモンガは、急に入つて驚かせないようゆっくりとドアノブを回した。

「……クローネ？」

しかしそこには豪奢な家具や調度品が並ぶだけ。あるはずの姿がどこにも見当たらぬ。

(一体、どこに行つたんだ。そもそも命令がない場合のNPCはどう考えて行動するのか見当がつかないぞ)

(…………本当にそうか？)

——ごめん、お前の顔見てると思い出して辛いんだ。

1年前言つたことが頭をよぎり、血の気が引いた。もしアルベド達のように高い忠誠

心や愛情があつたとして、実の父親に拒絶されたらどんな行動をとるか。身体の自由が許され、誰も見ていないのなら、もしかして——死の支配者になつても分からぬほど鈍くはなかつた。

最悪の事態を確認するため急いでリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンで王座の間の廊下へ転移。叩きつけるようにドアを開け、王座に座るとマスター・ソースを確認した。クローネの名前は、ある。

素早くこめかみに指を当て、アルベドに〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>を繋いだ。

「アルベドッ！　まだ闘技場にいるか！　階層守護者と下僕たちに伝えて全階層を封鎖しろ、クローネを見つけたらすぐに保護するんだッ！」

『承知しました、すぐに動きます。デミウルゴス！』

怒鳴りつけるような声音にアルベドも事の重大さを察して理由も聞かずに指示を出す。

『他にご指示はござりますか？　モモンガ様』

「搜索は各階層でスキルによる探知に優れたものに任せろ、あとは私が直接見て回る！」

『伝言』<sup>メッセージ</sup>を切りながら、長いロープを引きずつて王座の間を駆ける。

まだこの世界に何があるか分からぬ。全ての階層を搜索してでも外へ出る前に見つけなくては。取り返しのつかない事になつてからでは遅すぎる。

自らの言葉で傷つけてしまったあの子に、これ以上他のことで傷ついてほしくない。

たとえ失望されていたとしても、守りたかつた。

ただの杞憂であれば良い。

しかし、無常にも嫌な予感は的中することになる。



——リ・エスティーゼ王国、エ・ランテル領の国境付近。林の中にその姿はあつた。至高の41人が逃え、モモンガが手を加えたその姿は、当たり前ではあるが1年前と全く変わっていない。

ただ、虚ろな目ではらはらと涙を流していること以外は。

心細そうに白い剣を抱きしめ、夜風に晒されながら震えて座り込んでいる。帰り道も分からず、途方に暮れていた。

なにより帰ったところでこうして捨てられた自分に居場所があるのか自信がなかつた。

その近くをサクリ、サクリと草を踏みしめて誰かが近づいてくる音がした。ランプを持っているのか、ゆらゆらと林を抜けるとオレンジ色の光が少女を照らした。

「まあまあ、こんな所でどうしたの？　この辺の子じやないわねえ」

林から顔を出したのは、白髪を後ろで団子のようにまとめた老婆だった。

本来なら敵対している種族。襲われたらまず逃げられない状態だつたが、少女には自分が死すらどうでも良い些末な事としか感じられなかつた。

ぼんやりと老婆を見ていると、目線を合わせるようにしやがみこんできて、涙を拭われた。

「何もしないから家にいらつしやい、素敵なドレスが汚れたら大変よ。暖かいミルクも用意してあげますからね」

大好きな父とは違う、シワだらけの暖かい手に引かれ暗い夜道を歩いていく。

この老婆について行くのがいい事なのか悪いことなのか分からぬが、今だけは考えるのでやめて流されることを選んだ。

# 待ち続けた子供の話

わたしのパパはとても友達想いの優しい人。

死靈を操り、万物の死を司る支配者で、人間からすれば天敵だけど。

お友達の至高の方々とナザリック、わたしをとても大事にしてくれた。

至高の方々とはあんまり楽しそうにお話してから拗ねたくなる時もあつたけど、撫でてもらうと嬉しくてすぐに忘れられる。

でもそんな大切なお友達がどこかへ行つてしまつてから、パパは出かける時間が多くなつた。

ナザリック  
家にいる時はわたしとパパの部屋に来てくれるから寂しくなんてなかつたけど、部

屋にいる時も忙しそうに何かを見てたし、口数も減つたからすごく心配してた。

前はあんなにお話を聞かせてくれたのに。お友達が居なくなつて寂しいんだつて直ぐに分かつた。

どんなに忙しくなつてもパパは毎日必ず会いに来てくれる。

わたしは傍にいる事しかできないけど、少しあは役に立つてる気がして嬉しかつたし誇

らしかつた。

守れるほどわたしは強くなかつたし、パパも守られるほど弱くはなかつたから。だから顔を見るのが辛いと言われても我慢した。

駄々をこねて困らせるくらいならひとりぼっちになる方がよっぽどいい。

それに、優しいパパなら辛いことを乗り越えてまた会いに来てくれるつて信じてた。

1人になつてからはこうしてパパとの記憶を繰り返し、繰り返し思い出している。

もう何回目だろう、あと何回でパパは来てくれるかな。ちょっと辛くなつてきたけど、きつとあともう少しだよね。

パパが帰つてきたら何して遊んでもらおうか、またセバスとデミウルゴスとお出かけ出来るかな。

早く、パパに会いたいな。

何度願い、何度も繰り返したのか。もう数えるのはやめていた。

今日も開かなかつた部屋の扉。少しガツカリしながら諦めて記憶を再生しようとした今日、いつもと違う事があつた。

急に胸が焼けるように熱くなつて、それから――



「なんだか妙な胸騒ぎがして、少し見て回つていたら貴女を見つけたの」

そう語るゲルダと名乗った老婆はクローネを家に招き入れ、温めたミルクにはちみつを垂らして差し出した。

ランタンに照らされた家は木と石壁で出来ている。クローネが座つて横長のソファーも簡単な作りをしていた。

「それは辛かつたわねえ……」

隣に座つて小さな背中をさすりながら、辛抱強く話を聞き出したゲルダはそう呟いた。

聞き慣れない単語が多くたものの目の前でさめざめと泣く子供の状況は理解出来る。

父親に何か辛い出来事がありそれを連想させる子供を遠ざけた。そして何らかの事故か故意か、突然見知らぬ土地に飛ばされてここにいる。

聞けばそんな芸当が出来るのは特別な指輪を持つ魔法<sup>マジック</sup>詠唱者<sup>キャスター</sup>の父親だけ。

真相は定かではないが、今まで抑えこんでいた不安が爆発し、捨てられたと感じるのには無理もない。なにより長い間放置した親を今もなお慕い続け、自分を責める子供をここまで追いかけて親にも責任がある。

ゲルダは氣の毒そうにクローネを見ると、ぽつぽつと控えめに話し続ける。

「分かってた、分かって……考えないようにしてた……パパはわたしを見ると思い出すから、いらなくなつちやつたのかもつて……」

実の所、クローネがいつまでも待つつもりでいられたのは最初だけだつた。

何も変わらない部屋に一人で居るのが寂しくて、モモンガに撫でてもらつた記憶を巻き戻しては自分を慰めたのは数えきれないほどだ。

「本当に、そうかしら」

「え？」

「いらない、とは言われてないのよね？」

「……うん」

「なら本当はどう思つてのかなんて聞かないと分からないうわ、たとえ血の繋がつた親子でもね」

それは実感の伴つた言葉だった。

ゲルダは父親に全く同情しなかつた訳ではない。親にも心があり、どうしようもなくなる事などいくらでもある。

なにより直接傷付ける前に自分から引き離すような親が、不要になつたからと子供を捨てるような真似をするとはとても思えなかつた。

「で、でも……」

「それとも、貴女のお父様はそんな薄情な人なのかしら？」

「違う!!!」

「ゲルダの挑発にクローネは拾われてから初めて声を張り上げた。響く自分の声に気が付いてバツが悪そうに俯き、小さな声で謝る。

「気にしないで、私も意地の悪い聞き方をしたもの。でも、今のでよく分かつたわ」

「ゲルダはクローネの様子を見て確信し、俯く横顔を真っ直ぐに見つめた。

「本当はどう思ってるのか聞きに行きましょう。勇気が出ないならおばあちゃんが一緒に行つてあげる」

「……でも……もし、いらぬいつて言われたらどうすればいいの……？」

「その時は、私がとつちめてやるわ。なんでこんな良い子を捨てるのか！…ってね」

「クローネがぎよつとして顔を上げると、ゲルダはいたずらっ子のような顔でウインクする。」

モモンガは身長170cm越えの生と死を司るナザリックの王。片や魔法も使えない老いた人間。モモンガがその気になれば指先ひとつで消し飛ぶだろう。

冗談でもそんなこと言う人間が存在するなんて信じられなかつた。

しかし不思議と、怒った老婆にポカポカと殴られ慌てるモモンガが容易に想像でき

る。

「……う」

あまりにも命知らずな光景がおかしくて笑つたつもりが、零れたのは涙に濡れた声。  
「ううつ」

至高の方々にからかわれても滅多にやり返さず、いじけて部屋の隅に陣取り、自分を撫でる優しい父を思い出したからだ。クローネにとつてモモンガという父親はそういう人だつた。

なんだかずつと前の事のように感じて涙が止まらない。

ゲルダの冗談に“自分は幸せな思い出を繰り返していたつもりだつた”と思いつらされた。

モモンガは至高の41人を束ね、ナザリツクに仕える者にとつて絶対の支配者。信じないなんて以ての外、その意志を疑うことは責められて然るべき行為だ。

エクレアやペストーニヤが世話係なのも娘だから。どんなに良くしてくれても、いざと言う時はモモンガの味方になるだろう。

だからこそ、純粹に自分を心配する言葉も心に響いた。

責められるべき自分に資格がないのは分かつていたが、優しい父を恋しがつて駄々をこねるのを許された気がしたのだ。

「うううっ」

声を上げて泣き始めたクローネをゲルダはそつと抱き寄せ、頭を撫でて慰めた。

「パパに会いたい……！　会つてお話したい……！」

「貴女がそんなに大好きなお父様なんですもの、きっと大丈夫よ」

「うん、うん……っ」

「大丈夫、大丈夫」

クローネが泣き止むまで、撫でる手が止まることは無かつた。

「今日はもう寝て、明日出かける準備をしましよう。エ・ランテルなら人も多いし貴女が住んでいた所を知つている人がいるかもしれないわ」

老婆は飲み干したカツプを受け取つて机に置き、クローネを貸した寝巻きに着替えさせてベッドへ連れて行つた。

ベッドに横たわつたクローネに毛布をかけ寝るまで付き添うつもりのようだ。

メイドでもないのに甲斐甲斐しく世話を焼く姿は心に余裕が出来たクローネは疑問を抱く。

「あの……いまさら聞くのも変なんだけど……おばあちゃんは何でここまでしてくれるの？」

「そういえば、なんでかしらねえ。ああ、貴女が可愛いから助けてあげたくなるのかもしれないわ」

クローネは泣いて赤かつた顔を更に赤くして、口元まで潜った。聞かなきや良かつたと顔に書いてある。

わかりやすい反応にゲルダはまた笑い、ぽんぽんと優しく叩いて寝かしつけた。

「おやすみなさい、良い夢を」  
夜道で出会った時は不安を覚えた暖かさが今は酷く落ち着く。クローネは目を閉じ、ゆっくりと眠りについた。

——翌朝、クローネは遠くで大勢が騒ぐような音が聞こえて目が覚めた。

眠氣で閉じそうになる目を瞬かせながらベッドから降り、朝日が差し込むリビングを覗き込んでもゲルダの姿は見当たらない。まだ音は聞こえている。

(おばあちゃんどこいったのかな、それにこの音なんだろう)

くぐもつてよく聞こえない音を聞こうと、ゲルダの物と思しき羽織ものを肩にかけ、木製の戸を開けた。

「いぎやああアアあ、あ、!!」

次の瞬間、クローネの耳に届いたのは男の断末魔。戸が完全に開け放たれると何軒か先の家の前で、円柱の兜を付けた騎士に村人らしき男が切りつけられたのが見えた。

切られた村人は血飛沫を上げて倒れたままピクリとも動かない。村人が沈黙しても、わあわあとそこかしこで誰かの悲鳴が聞こえてきた。

この村は、何者かの襲撃を受けている。

あまりに突然の出来事はクローネに理解する事を遅らせたが、ゲルダを探していたことを思い出し、立てかけてあつた自分の剣を持つて外に飛び出した。

「クローネちゃん！」

丁度その時、脇道からゲルダが血相を変えてこちらに走ってきた。怪我は見当たらぬい。

「無事で良かつた……！　早く逃げましよう、出来るだけ遠くへ！」

「う、うん」

恐怖で震えながらもクローネを連れていくために引き返して来たのだろう、顔色は白かった。

手を繋いで走ろうとするゲルダに続こうとしたが、先にいる人影に気付いて慌ててブレーキを踏んだ。

人影はさつき見た騎士と同じ姿をしてこちらに剣を向けて走ってきていた。もう間もなく相手の間合いに入る距離。

「おばあちゃん！ わたしの後ろに！」

避けられないと判断したクローネは背にゲルダを庇い、剣を横に振った。

「魔法二重化・ツインマジック 盾壁シールド・ウォール！」

剣に合わせて出現した不可視の障壁は振りかぶられた騎士の剣をギンツと高い音をたてて弾く。

単なる詠唱までの時間稼ぎを狙っていたので破壊されると予測していたが、破られることなくそこにある。

敵の戦力を推察したクローネは咄嗟に用意していた呪文を切り替え、反動でたらをつけむ騎士に追い討ちをかけるように詠唱した。

「ホールド・バースト 対人金縛り！」

精神系の麻痺を付与する魔法は正しく作用し、騎士は剣を落としてだらんとその場に立ち尽くす。クローネの推察通り、第3位階魔法が通用する相手だった。

敵の総数も戦力も分からぬ現状、悪戯にMPを消費するのを避けるため大きく隙が

生まれた相手に試せたのは運が良かつた。

しかしその代わり、魔法の詠唱に気づいたのか村人を斬り殺した騎士がこちらに向かってきている。

「おばあちゃん、こつち！」

「え、ええ」

呆然としていたゲルダの手を引いて走るクローネ。ナザリツクを出てから初めての戦いが始まった。

# 戦士長ガゼフ・ストロノーフ

「やはり、追いつけんか」

国境周辺の村々が襲撃を受けているとの報告を受け、王の命令で隊を率いて敵を追つていた王国戦士長のガゼフ・ストロノーフは到着した村の惨状を見て苦々しく呟いた。他の村より崩れている家は少なかつたが、それでも何人かの村人の死体が野ざらしになっている。

やるせない気持ちで馬から降り、見開かれた村人の目を閉ざした。

「戦士長、あれを」

部下の声に肩越しから振り返ると、家の影から数人の村人がこちらの様子を伺つていた。少数であつても生き残りがいたことに安堵して立ち上がる。

「私は王国戦士長、ガゼフ・ストロノーフ！　襲撃を受けた村を回つている者だ！　敵ではないから安心して欲しい！」

それを聞いた村人達の中からガゼフに歩み寄ったのは杖をついた老人。しわがれた声で村長が襲撃で亡くなつたため代理を務めている者だと名乗り、村人が集まる広場へ

案内した。

「そうか……間に合わなくてすまなかつた、私が謝つて済むことではないが……」

「おやめ下さい、戦士長様のせいではありません。貴方が心を痛めて下さつてしているのはよく分かつておりますよ」

「いや、気を使う必要はない。殺された者の無念を思えば、私の心労など比べるまでもないだろうからな」

無力感がにじみ出た険しい表情でかぶりを振つたのを見て、老人は黙つて頭を下げた。

「他の村々も同じように襲撃を受けているが、生き残つたものが明らかに多い。何があつたか教えてくれないか」

「ええ、実は魔法の心得がある子がおりまして、その子が助けてくれたのですよ」

ガゼフはその隣で話を聞いていた補佐役の戦士と思わず顔を見合わせた。

言い方から察するにまだ若いのだろう。そんな身でありながら村を守るために力を使つて退けたとはよほど優秀なのが。

老人の視線の先を追うと、老婆に付き添われる明らかに小柄な人影が見える。子供、と戦士が呟いた。

迷いなく歩み寄り目線を合わせる為に片膝をつく。だが大柄な男が怖いのか不安そ

うにしていたので、できるだけ穏やかに切り出した。

「俺はガゼフ、王国で戦士長をやっている。良かつたら名前を教えてくれないか？」

「……クローネ、です」

詰まりながらも名前を教えてくれた少女の、自分の手ですっぽりと覆い隠せるほどの小さな手を取り、両手でしつかりと握る。

「クローネ、君がこの村を守つたと聞いた。怖い思いをしただろう……だがその勇気に感謝する。本当に、ありがとう」

ガゼフ・ストロノーフは肩書きや見た目こそ屈強な戦士そのものだが根は誠実な男。丁寧な物腰に人柄が伝わったのか、まだ影はあるものの安心したように手を握り返してくれた。

「大したことはしません、戦士長さま」

「謙虚だな。俺ならば大声で自慢して回っているところだ、見習わなくては」

軽口に少女が少しだけ笑みを浮かべる。それを見たガゼフの顔も綻んだが、

「戦士長、お話中失礼します。周辺の調査が終わりました。敵は北西——やはりカルネ村を目指しているようです」

部下からの報告に緊張が走った。

「今すぐ護送を必要とするほどの重傷者はいないが、離れて人質にでもされたら打つ手がない」

「かといってただでさえ少ない隊を更に分断してはカルネ村を救うことも難しくなります。間に合う保証もありません」

そのまま村長代理の老人とガゼフ達の話し合いが始まり、離れるタイミングを見失つたクローネはゲルダと手を繋ぎながら話を聞いていた。

しかし先程、カルネ村の名前が出た時の手の震えが気になつたので、声を潜めて話しかける。

「ねえ、おばあちゃん、カルネ村つて知つてるところ？」

「亡くなつた親友の息子夫婦が暮らしているの、どうしましよう……」

思い詰めた表情で話を聞いているゲルダ。

すでに騎士達がこの村から発つてからかなり時間が経つていた。どのくらいの距離かは知らないが、話し合う大人の顔を見れば今から追いつくのは難しいと分かる。

「早急に決断しなくてはならないな……」

ガゼフの独特な低い声が耳に入り、思ったことを口にした。

「あの、馬に加速の魔法をかけてはどうでしょうか」

驚く大人達の視線が集まる。

クローネの提案はこうだ。まず加速の魔法を途切れさせないようガゼフ達に同行し、その間は村に広範囲の守りの魔法をかける。

さすがに一日は持たないが、長持ちする簡単な探知魔法を掛けておけばクローネに伝わるので即座に転移すれば対処出来るだろう。

「君の実力を疑っているわけではないが、負担がかかりすぎるのではないか？」

「どの魔法も簡単なものなので大丈夫です」  
同行を願う理由は『ゲルダの知人を助ける』以外にもう二つある。騎士達との装備の差と魔法詠唱者マジックキヤスターの存在だ。

第3位階を防ぐほどではなかつたが、微かに魔法で強化された鎧。対してガゼフの部隊はとんどが革製の軽鎧。プレートで補強していても魔法防御力など無いに等しい。

極小数ではあつたが魔法で家を焼き放つた術者の存在も確認出来て以上、苦戦は免れないだろう。その間にカルネ村が受ける被害を考えれば協力を申し出るのは当然だった。

「分かつた、だが危険だと思つたら君だけでもすぐに逃げろ」

村を預かる老人が同意したので渋い顔をしながらもガゼフは提案を受け入れた。すぐに出発の用意をするよう控えていた戦士に命じる。

「クローネちゃん、いいのよ、そんな」

「ちゃんと帰つてくるから心配しないで。間に合うかは分からないけど、とにかく行つてみる」

「……おばあちゃんとの約束は覚えてるわよね。友達の家族が亡くなつていても、絶対にやつちやダメよ。なによりも貴女の安全が1番なのだから」  
ゲルダの言葉に赤い瞳を伏せて頷いた。

家に戻り、昨夜から脱いだままだつた装備に着替える。

足と手の装備は金属製だが、流石にドレス姿は目立つのでゲルダがフード付きのマントを貸してくれた。

諸々の準備を終え、手を引かれて馬に跨る。

「戦士長様、どうかよろしくお願ひします」

「ああ、必ず生きて帰す」

心配そうに胸の前で両手を組むゲルダにガゼフは力強く誓う。  
そして並ぶ部隊に顔を向けた。

「——全員揃つたな！ 目指すはカルネ村、全速力で向かうぞ！」  
登る太陽に届かんばかりに、戦士達の雄叫びが天高く響き渡つた。



数時間後。

エ・ランテル領北東、カルネ村。

ネムは震える足を必死に動かして走っていた。  
姉のエンリが身を呈して庇い、時間を稼いでくれている。その隙に少しでも逃げなければ。

「あつ！」

石に躊躇って転んでしまった。擦りむいた手と顔が痛くて目に溜まつた涙がポタリと落ちた。

痛みで動けないなんて弱音を吐いてる場合ではないと、幼いながらも理解しているがもう限界だった。

ガシャ。

嫌な音がした。さつきまで散々聞こえていた、村を荒し回る襲撃者の足音だ。背後を見上げるように振り返ると、騎士が剣を構えてネムを見下ろしていた。

血の跡が残る剣は天を向くようにゆっくりと上げられる。

ああ、エンリは、お姉ちゃんは。

同じくらい怖がっていたのに自分を逃がすために手を引いて走ってくれたお姉ちゃん

んは。

逃げる途中に見た血まみれの村人と、騎士へ掴みかかったエンリが重なる。ネムは残酷な現実を理解してしまった。もう逃げる気力は——残つていない。

騎士の剣が自らに振り落とされるのを見ていることしか、出来なかつた。

「——〈対人金縛り〉！」

ところ変わつてカルネ村の広場。

クローネが索敵魔法を使用し、敵の大半がここに居ると分かつたのでこちらをガゼフの部隊が。

まばらに散つた騎士を掃討する部隊を補佐役に任せ、今は2部隊に別れている。

ガゼフ達が予測していた罠、待ち伏せの用意が完了する前になんとか叩く事は成功したもの、村への被害は大きいものだつた。

「生存者を守ることは出来ましたが、間に合つたとはとても言えませんね」

「そうだな、壊滅には至らなかつたが復興には時間がかかるだろう。なんとか支援が行き届けばいいが、ままならんものだ」

助けた村人達からは感謝されたが払つた犠牲と彼らの今後を思うと素直に受け止めることは難しい。憂いを帶びた目でお互いを労る村人達を見た。

「戦士長、ただいま戻りました」

「ああ、ご苦労。報告してくれ」

「はい。森林までの掃討は完了、村人は数名ですが保護出来ました。重傷の少女が1名いましたが、クローネさんの治癒魔法で傷は塞がりました」

「そうか。彼女には助けられてばかりだ、礼は弾まないとな」

「ええ、全くです」

「——そしてもう一つ報告を。村を囲うようにして新たな敵が接近しつつあります……如何されますか」

敵を目前にしたかのように眉間にシワが寄る。

間もなくガゼフを囮にして村人を逃がす作戦がクローネに伝えられた。

いくら王国戦士長とはいえあれだけの数の魔法詠唱者マジックキャスター相手に生き残るのは困難。つまりそういうことだつた。

同行が許されず落ち込んだ様子のクローネを見てガゼフは苦笑する。

「気持ちは嬉しいが君を無事に帰すと約束してしまつたからな。

だが一つ言つておこう、俺は死にに行くのではないぞ。『王の剣』として国と民を守りに行くんだ

「王の、剣……？」

なぜか驚いた顔で見上げるクローネの薄い肩に手を置く。

「あとは頼んだぞ」

幼い頃の自分よりもずっと頼もしい子供の、命を惜む優しさが誇らしかつた。だからこそ大人として命を賭して守らなければならない。

平民時代に由来するその決意はガゼフを死地へと赴かせた。

——戦線に逃がした筈の戦士達が加わり、不利な戦況でありながらも一時は巻き返しだかに思えた。

しかし増え続ける天使達を切り倒すことで精一杯。間合いを詰めようにも敵のマジックキヤスター魔法詠唱者の遠距離魔法に被弾し、また天使に道を塞がれる。

部下達は地に伏せ、立つているのは己のみ。

背中を切られ、腹を貫かれ、鎧も耐久値の限界を超えて碎け散っている。

王国を守護する戦士長としての意地で立ち上がるることは出来たが、頭にはこれまでの人生が走馬灯のように流れている。

「そんな夢物語を語るからこそ、お前はここで死ぬのだ、ガゼフ・ストロノーフ。その身体で何が出来る?」

「お前を殺したのち村人達も殺す。無駄な足掻きを止め、そこに大人しく横になれ。せ

めてもの情けに苦痛なく殺してやる」

敵の指揮官が嘲り笑い、歌うように死を宣告する。そんなことは言われどもよく分かつっていた。

しかしガゼフにとつてあの時からけして叶うことのない夢ではなくくなっている。

（我ながら虫のいい、守ると誓つておきながら縋りつこうとしている。だが、）

「愚かな事だ。夢を見るからこそ希望がある。ここで俺が倒れたとしてもその次が、いつかお前達の喉元に食らいつくだろう」

副長に語つた夢を体現する少女がいた。ならば自分も引くことなく戦うまで。そうすればいつかきっと届くはずだと信じて。

「だからこそ、今この先へは一人も通さん!!」

溢れ出る血を嗜み締めながら、剣を握る手に力を込める。夕焼けに染まつた空を覆うほどの天使達がガゼフに容赦なく迫つた、その時。

『天使よ、去れ。ここはお前たちがいる場所ではない——此なるは死の王が戴く冠なり』

鳥肌が立つような禍々しい威圧感がガゼフを中心に周囲の天使を吹き飛ばし、瞬く間に光へと変えた。

果然と上を向いていたが、目の前にいつの間にか先程まで思い浮かべていた人物が背を向けて立つている。

「……何故、君が此処に

「あなたと同じ理由です、ガゼフ戦士長」

こちらを見つめる横顔には、あの不安そうな少女は何処にもいなかつた。

# 周辺国家最強 対 威光の主天使 I

クローネは至高の御方々に身体を繋ぎ合わされた時、こう願われた。

——“分け隔てなく、慈悲深くあれ”と。

多くの人間種と敵対するアインズ・ウール・ゴウンにおいて矛盾するあり方だ。

それがどういつた意味を持つのかはよく分からなかつたが、神にも等しい至高の存在に望まれたのならそう在ることに疑問など抱く必要があるだろうか。

幸いにも父に似て穏やかな性格だつたので難なく適応できた。人やモンスターを嫌う必要が無くなつて喜んだ程に。

だからゲルダを助けたのは彼女にとつて自然な行為だつた。

そしてクローネは一つ、やつてはいけない事をした。

それは自分の命を軽視すること。クローネは心を持っているがその身は人でも不死者アンデッドでもなく最愛の父の“地位を示す唯一無二の宝”なのだ。

いくら捨てられたからと自棄になつて簡単に投げ出していいほど軽いものじやない。

だからこそ父の愛情を疑い、存在意義を忘れてしまつた自分を正してくれた恩人を助

けるのにこれ以上の理由はなかつた。

(でも、この人たちと敵対することでナザリックやパパの不利益になるような事になつたら、その時は……)

信賞必罰。クローネの知る父であれば分かつてくれると信じてゐるが、それでもナザリックの不利に働くようであれば、許す許されるに關わらずこの手で責任を取る覚悟だ。

たとえ命を持つて雪ぐことになつても、自らのあり方とナザリックを尊重した結果にすぎない。軽んじることの許されない自分を賭けるほどの恩を受けたのだから。

それでこの身が滅びるならば、それこそがクローネに望まれた役割なのだろう。

“王の剣”として戦うガゼフと同じく、クローネも“王の冠”として受けた恩を返すためにこの場にいた。

呆然とこちらを見ているガゼフに来た理由を説明する。

「予定とは違う形になりましたが村人の避難が終わつたので、ここで加勢するのが最善だと判断しました。……すみません、勝手な真似をして」

「——無事なんだな」

「村の付近を縄張りにしていたモンスターに匿つてもらつてゐるので安全です」

「そう、か」

緊張の糸が途切れ、膝を突いたガゼフに駆け寄つて肩を貸す。息は荒く、出血が酷い。いつ気絶してもおかしくない状態だ。

「話は終わつたか？」

敵の指揮官、スレイン法國陽光聖典隊長ニグン・グリツド・ルーアンが問い合わせた。先程浮かべた嘲笑はそのままに、余裕を感じさせながらも黒い瞳はクローネを油断なく睨んでいる。

「その歳で〈退散〉、いや〈消滅〉の能力を有しているとは大したものだ。一体何者だ？」  
「ただの通りすがりです」

「ほう」

(チツ、そんな訳あるか馬鹿が)

ニグンは部下の手前、余裕のある態度を崩さなかつたが内心では盛大な舌打ちをした。

〈退散〉は天使やアンデッドなどを退ける信仰系魔法詠唱者<sup>マジックキヤスター</sup>の基本的なスキル。その上位に位置する〈消滅〉は自らよりも圧倒的に格下の存在にしか通用しない。

さつき消滅した天使は部下が召喚した第3位階の『炎の上位天使』<sup>アーヴィングエル・フレイム</sup>

つまり目の前にいる小娘は自分と同じ第4位階魔法の使い手である可能性があるということ。クローネは知らなかつたがそれはこの世界で一流以上の術者を指している。

(しかしそれも数で押してしまえばどうにでもなる、この戦力差ならば勝負にもなるまい)

ニグンの部下は第3位階を修めている一流揃い。迎え撃つ相手は足でまといの戦士を抱えた、毛並みの珍しい小娘一人。恐れる必要がどこにあるのかと思い直し、浮かべた笑みを深する。

対するクローネは無感情にニグンへ問いかけた。

「一つお聞きします、あなた方は何故ガゼフ戦士長様を狙うのですか」

「冥土の土産に教えてやろう……とでも言いたいところだが答える必要性を感じないな、貴様如き小娘が理解出来るとも思わん」

分かりやすい挑発に一度目を閉じる。一陣の風が吹き、クローネの前髪を揺らした。

次に目が開いた時、父譲りの赤い瞳は迷いなく前を見据えた。

「そうですか、分りました。

——  
〔集団中傷治癒〕  
〔マス・キュア・モーデレット・ウーンズ〕

おもむろに唱えられたクローネの詠唱はガゼフと周囲に倒れた戦士達をやわらかな緑色の光で包み込み、レベルの恩恵を得た魔法は致命傷をも癒す。

傷が消えた事でまだ意識のあつた戦士達が徐々に起き上がり始めた。

「なッ」

「集団雄牛の筋肉」  
マス・ブルズ・ストレングス

「集団熊の耐久力」  
マス・ベアズ・エンデュアランス

——逆境を跳ね除ける雄牛の肉体を、刃も通さぬ熊の如き加護を。

新しい魔法が唱えられる度に腹の底から力が湧き、分厚い毛皮を着たような硬い感覚が身体を覆う。

戦士の1人が手を固く握つて、武技とは違う新しい力を確かめた。

「スキル」（徒党） 対象は王国戦士団。

「上級魔法の武器」  
グレーター・マジック・ウェポン

「上位魔法盾」  
グレーターマジック・シールド

——何者をも貫く魔法の矛を、あらゆる魔法から守る盾を。

2つの紫の光が戦士達の武器に魔法を込め、身体に魔法への耐性を付与する。

「上級勇壮」  
グレーター・ヒロイスム

——そして勇猛なる戦士に活力を。

怒涛の連続詠唱の最後は、特に疲労の色が濃いガゼフに一時的だが士気を上げる魔法で疲労感にマスクをかけた。

された事に気付いたガゼフが少し照れくさそうに「ありがとう」と笑い、クローネの手を借りて立ち上がる。

いつの間にか戦士達も後ろへ並び、大敗を期してなおも戦意を失うことなく敵を睨みつけていた。

「強化魔法を付与しました、これで天使とも対等に戦えるはずです」  
ガゼフは全くと言つていいほど魔法のことを知らなかつた。だが今まで行動と共にし、絶望的な状況を幾度も覆した少女の言葉を疑う余地などない。

魔法で強化された拳は確かに戦う前以上の力を感じせる。

「全員聞こえたな、反撃するぞ。」

——王国の民に仇なす敵を討てツ!!

『うおおおおおおおおッ!!!』

流した血が滲むような力強い雄叫びを上げ、仇敵に迫る王国戦士軍。

予想外の展開に陽光聖典の術者達に動搖が走つたのを見て、すかさずニグンが命令を下す。

「天使を召喚して迎え撃て！　たかだか小娘の魔法を纏つた程度で、人類の防壁である我々を破れるものか！」

術者は命令通り天使を召喚し、迫り来る戦士に差し向ける。が、しかし。  
「だあああッ!!」

種族の特性でレベルは同じであつてもステータスで勝り、戦士2人で押さえ込むのが

やつとののはず、だが戦士1人に止められた。

追撃に遠距離魔法を打たせても戦士はよろめくだけで歯が立たない。

(第3位階魔法をも弾き返す魔法盾だと!? そんなもの聞いた事が……!)

次々と天使達が切り倒され、劣勢に追い込まれたニグンは額に汗を滲ませる。

その反対側で戦いを観察していたクローネは静かに思考していた。

(これ以上MPを消費したら相手の切り札が出た時に対応出来なくなる、戦士の皆さん

に頑張つてもらつて相手の底を引きずりだしてから畳み掛けよう)

ドレスと共に授けられた白い剣『白亜の装飾剣』は回復・支援魔法の必要MPを大

幅に減少させるが、それでも限度がある。

クローネは至高の御方の一人、ビルドを考案したぶつと萌えがモモンガに語つた“  
ヒーラー3ヶ条”を再び思い返した。

1、誰よりも先に倒れてはならない。

2、MPを浪費することなくPT回復に備えるべし。

3、戦況をよく読み行動せよ。

その実、ヒーラーは頭を使う役割だ。攻撃を受けないことも大事だが、無駄な一手の  
せいで回復が間に合わず全滅もありうる。常に戦況を先読みし、適切な魔法を選択して  
支援するのが鉄則。

そしてユグドラシルの基準で考えて手持ちの即死や攻撃魔法などは本業に大きく劣り、1001vが当たり前の環境で育つたため、戦力として役に立たない意識があつたのもクローネをより慎重にさせた。

「監視の権天使！」力を行使し、敵を一掃せよ！」

ニグンの声に意識が現実へ戻る。

見ると今まで奥で控えていた第4位階の天使が前に出た。

それ迎え撃つは、我らが王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。

「彼女の魔法がどれほどの力か、試すには丁度いいな」

好戦的に構え、腰を低く落とす。そこに監視の権天使が浮遊しながら近付き頭上からメイスの重い一撃を振り落とした。

ガゼフはバスターードの腹で受け止め、押し返して素早く構え直す。

「武技〈斬撃〉!!」

下段からの強烈な払い上げは権天使の身体に大きな亀裂を走らせ、体勢を大きく仰け反らせた。

天使の中でも防御力に特化した上位天使の装甲を容易く破つた事実にニグンは目を見開いて驚愕する。

どどめの横薙ぎで、その場にいる1番の戦力は光の粒となつて碎け散つた。

「馬鹿なツ!! こんなことが有り得るか! 神に仕える上位天使が押し負けるだと!?」  
 「隊長! 天使が全滅しました、我々は一体どうしたら!」

天使は消え、部下達にも戦士の手が迫る。自分が召喚できる最高戦力も今倒され絶体絶命の状況。

追い込まれた状況を覆すべく、胸元の“切り札”へと震えた手を伸ばし、それを授けた神と神の意志に感謝した。

「最高位天使を召喚する! 人類が到達出来ぬ第7位階魔法、その身をもつて神の威光を知るがいい——」

取り出した『魔封じの水晶』は光を放ち辺りを照らす。

ニグンの尋常ではない様子にクローネは『飛行』でガゼフの横に並んだ。

「威光の主天使!!」

# 周辺国家最強 対 威光の主天使 II

掲げた水晶から現れたのは、美しい純白の体を持つた見上げるほど巨大な天使。日が落ちてもその存在は天に祝福されたかの如く発光している。

「これは……」

流石のガゼフも絶句し、肌で主天使が放つプレッシャーを感じていた。

立ち向かう人類を寄せ付けぬ聖なるオーラに存在自体を否定されているような感覚は初めてだ。

勝てない。

長年の経験により、そう直感する。

引くことは出来ないがせめて、クローネだけでも逃がさねばと考えた瞬間、隣から魔法の詠唱が聞こえた。

「混沌の鉄槌」——!!

突如、主天使がけたたましい音と共に爆撃され、色とりどりの煙が立ち込める。「戦士長様、 いけますか」

ハツと隣にいたクローネを見ると、爆風で黒いベールをたなびかせ、取り乱した様子もなく真っ直ぐに主天使を見据えている。

堂々としたその姿に天使以上の底知れない存在感と、年恰好からは想像も出来ない上に立つものの気迫を見た気がした。

心強い味方に覚悟を決めたガゼフは問う。

「何か策があるんだな?」

「成功するかは戦士長様次第です」

「そうか、ここで乗らなければ男じやないな」

クローネが後ろに回り、ガゼフの背中に両手を向ける。

「先に謝つておきます、かなり辛いかもしれませんが耐えてください……〈勇者の奇跡〉

その言葉に頷こうとしたが、身体の中心からゴウ、と業火が立ち上ったような感覚に襲われ、自分の身体が暴れ馬のように制御が効かなくなる。剣を持つ手が震えるのを歯を食いしばって耐えねば身体が引きちぎられそうだつた。

湧き上がる得体の知れない力は身体を燃やし尽くし、ガゼフの肉体を主天使と同じレベルにまで引き上げる。

「行つてください!」

クローネの言葉に弾かれたように走り出す。

身体は未だ燃えていたが一歩進む度に頭が冴え渡り、力が馴染んでいくのを感じる。

重かつた身体は羽根のように軽く、思考に追いついて加速していく。

（構想は以前からしていた。俺ではそこに到達することは出来ないと思っていたが、今なら！）

クローネのスキル〈勇者の奇跡〉は1日に1回、他者を選択した敵一体と同じレベルに引き上げ、その分だけステータスも上昇させる。

自分に使う場合、回数制限は無いがユグドラシルでは1001vが上限のため、上がりきつてしまえば無用の長物。レベルアップで取得できる魔法もパッシブスキルも使えない死にスキルでしか無かつた。

しかし、この世界にはユグドラシルにはない“武技”という技能がある。

「行くぞッ！」

気合は十分、ガゼフは主天使が目前に迫つても足を止めることがなくソードを構えて勢いよく振りかぶる。

「エンラージ・マジック魔法距離延長・高品質変化！」

駄目押しの変化魔法が一時的に武器の品質を衝撃に耐えられる物へと変化させる。

クローネの防御力を突破する強化魔法、レベル分のステータス向上とレベル差によるペナルティの無効化、そして日々の鍛錬と才能が合わり、その全てが剣筋に乗る。

恐らく、誰もが想定していなかつた化学反応がここで起きようとしていた。

人類未踏の境地。少なくとも神の血を引かぬ定命の人間では至ることの無いステージに、ガゼフは片足を踏み込んだ。

「武技——八光連斬」!!

渾身の一太刀から生まれた八つの光が棒立ちの主天使を切り裂き、傷口から無数の亀裂を走らせた。

建物が崩れるような重々しい音を響かせながら地面へと落ち、砂煙を上げて光へと変わつていつた。

「——ツ!!」

もはや言葉が出ないニグンは、戦場であることを忘れて自らに迫る危険を察知するのが遅れた。

砂煙に紛れて主天使を切つた勢いのままこちらに迫るガゼフの切つ先を急所から外したのは意地かプライドか、即死は間逃れたが致命傷には違ひない。

「が、あ、ツ」

自らが召喚した天使と同じく倒れ伏し、息の上がつたガゼフに鼻先へバスターソード

を突きつけられる。

完敗だった。しかし1度は倒しかけた人間相手に命乞いをするほど、矜恃を捨てた訳では無い。自分を倒したところで終わるわけでは無いのだから。

「ふツ……ふ、ふはは、はは……これで、終わったと思うな、よ……ガゼフ・ストロノーフ……！」

大局の見えないお前では、人類を救う英雄には、成り得ない……決してだ……ツ!! 精々、箱庭の中で、仮初の平和を楽しむのだな……！」

血を吐き滴らせながら足を掴み、血走った目でこちらを見るニグンにガゼフは息を整えて言い放つた。

「俺は“王の剣”、それ以上でも以下でもない。そんなことは誰よりもよく知っている」 その言葉を最後に喉笛を切り裂かれ、陽光聖典隊長ニグン・グリツド・ルーアンは息絶えた。

「戦士長――！」

声に振り返ると、敵を鎮圧した部下達がガゼフの奮闘を讃えるように、疲れも忘れて満面の笑みで手を振っていた。

それに手を振り返そうとして、視界が暗転する。

「ガゼフさん！」

意識が飛ぶ直前、自分を呼ぶ少女の声がした。



ガゼフが目を覚ましたのは深夜だつた。

夜明け前の深い紺色の空が目に入り、周囲を見渡すと焚き火の近くで引かれた毛布に寝かされていた。

カルネ村の一角で野営をしているようで、見張りの戦士はいない。

しかしながら腹の辺りが暖かい。気になつて首を動かしてみると、ガゼフの腹を枕にしてクローネがスヤスヤと眠つていた。

まだ戦場での高揚感が抜けきていなか、なんだか酷く現実離れした光景に見える。

それでもあどけない表情で眠る少女が可愛く思えて白い頭に手を伸ばそうとした。

「う、ぐッ！」

動かした腕から全身に激痛が走る。

まるで全身が筋肉痛になつたよう、というか実際にそうなのだろう。覚えのある痛み

に呻き声が出た。

声で目が覚めてしまったのか、まだ眠たそうにぐずつていたが、悶絶するガゼフを見てクローネは飛び起きた。

「え、ガゼ、戦士長さま！ だ、駄目ですよ急に動いたら！」

「起こしてしまつてすまない、そんなつもりは、ぐツ、無かつたんだが」

「わたしは居眠りしてただけだから良いんです。でも、目が覚めて本当に良かつた……」  
泣きそうなクローネを落ち着かせるために、ガゼフは長時間寝たままなのも身体が辛いと言つて支えてもらい、なんとか上体を起こす。

焚き火の前に座り、その右隣にクローネが座る。動く度に痛みが走つたが一旦は落ち着くことが出来た。

「すみません、こんなに酷い疲労状態になるとは思わなくて、魔法では取り除けないんです」

「何を言うかと思えばそんなことか、そんなこと気にしなくていい。君が居なければ俺は今頃――」

言いかけた言葉を察したのか、俯いてしまつた。しかし礼を言われて落ち込むようなことは無いはずだが、と疑問に思つた。よく見れば顔色も良くない。

「どうした、元気がないな」

「あの、その事なんんですけど、実は」

戦闘で亡くなつた部下がいると聞かされた。クローネが加勢する前に致命傷を負つた者はガゼフも戦闘中に確認している。

生き残つた戦士によつて遺体は回収され、準備を整えてから荷車で王都へ帰還させる手筈だという。

「わたし、その……」

思い詰めた顔を見てなるほど、とガゼフは思った。

「それはゲルダという女性との約束に関係があるか？」

「！」

あの時の会話をガゼフは聞いていた。そして戦場で見たクローネの力は人の枠を超え、あの帝国の化け物魔法詠唱者マジックキャスターに匹敵する所か、超えてさえいる。

致命傷すら完治させる癒しの魔法を使い、その先があるとしたらそれは……

王国にもその魔法を使う冒險者はいるが、なんの後ろ盾もなく危険な場所に躍り出ることを厭わない少女が使つたとしたら、その末路は言うまでもないだろう。

「クローネ、少しいいか？」

名前を呼ばれて恐る恐る顔を上げた。

「元々、この任務で俺は死を覚悟していた。罠だということは分かつていたからな。そ

「れは部下達も一緒だ」

「それを助けてくれた事に感謝しても、助けなかつたからと責めるつもりはない。君が背負おうとしているものは俺が背負わなければならないことだ」

ガゼフの労りはクローネを更に辛くさせた。力を持つ自分を許してくれる優しさに応えられないのだから。

「だが、そうだな。俺だけでは潰れてしまふかもしない。困ったな」

「え？」

急に話の流れが変わつて戸惑うクローネにガゼフは右手を差し出した。

「一緒に背負つてくれるか、クローネ」

差し出された手とガゼフの優しい眼差しに目頭が熱くなる。駄々を捏ねた自分に気を使わせてまつたことに気づいて恥ずかしくなつたのだ。

「……はい！」

目を拭つてから左手を置く。まるで大きさの違う貝が合わさるように、大きな手と小さな手が固く繋がれた。

「そうだ、良かつたらガゼフと呼んでくれないか。堅苦しいのは抜きにしよう」

「うん、ガゼフさん。……ありがとう」

焚き火に照らされたクローネのあどけない笑顔。戦場での冷たくも凛とした姿から

は想像もできない、普通の少女の顔だった。

ガゼフは初めて見たクローネの満面の笑みに不思議と目が吸い寄せられる。

「？」

「あ、ああ。いや、なんでもない。こちらこそ、ありがとうございます」

一瞬頭をよぎつた言葉を頭を振つて追い出した。

まだ認めるには少し早い感情がどう転ぶのか、それはまだ先の話である。

# 始動

ナザリツク地下大墳墓、第9階層。

ある部屋に続く薄暗い廊下をアルベドは歩いていた。  
至高の存在によつて作られた廊下はいつも通りの暗さの筈だが、まるで主人の心を映  
しているかのように見える。

廊下から執務室に入り、その奥へ進んでやつとの思いで目的の部屋にたどり着く。こ  
こまで感じた重圧を振り払うようにアルベドは扉越しに声をかけた。

「モモンガ様」

返事はない。もう一度声をかけても返事が無かつたので一言断つてから部屋に入る。  
——中は酷いものだつた。壁にかけられた鏡はひび割れて欠片が床に散らばり、品の  
ある調度品はなき倒され、一部の壁は強い力で殴られたように丸く陥没している。

アルベドは眉を下げ、支配者といえど普段は温厚で慈悲深い主人にここまでさせた深  
い悲しみに胸を痛めた。

部屋の中を一通り見渡すと背を向けてベッドに腰掛けたモモンガの姿が目に入る。

扉が開く音が聞こえたのか、フードで隠れた顔が気だるげそうにこちらを振り返った。

「アルベードか」

「はい。許可なく入室してしまい申し訳ありません、お返事が無かつたもので何かあつたのかと」

「ああ……少し気が抜けていたようだ、お前の声にも気付けないとは」

主人の休息を邪魔した無礼に跪こうとするアルベードをモモンガは片手で制し、訪問した理由を尋ねる。

「ご命令通りナザリツクの全階層の搜索と、クローネ様と同様に消失した者がいないか確認致しました」

クローネが居ないと分かつた後、真っ先に地上へ繋がる出口をシャルティアの配下で固めさせた。

階層を跨いだ転移は『リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン』を持たなければ不可能であるし、NPCが自我を持つて行動できるにせよ第9階層から第1階層まではかなり距離がある。

異世界に転移してから多少時間は経っていたが、それでも〈転移門〉を覚えていないクローネのスペックで抜けることは難しいと断言できた。

しかしいくら探しても見つからない。全ての階層を駆けずり回つても何処にもいな

かつた。

そしておかしな点が一つ、『誰もクローネの姿を見ていない』のだ。

捜索の際にモモンガでさえ単身での外出を止められたことを考えれば、保護の指示がなくとも支援に特化したクローネが外に出ようとしたら必ず留めようとするだろう。

そもそも低位の『不可視化』(インヴィジビリティ)では容易く看破するトラップと配下がいるのにも関わらず通り抜けたというにはビルドの構成からして不自然だ。

だが現にクローネの姿はなく、モモンガの私室を最後に足取りは全く掴めなかつた。そこで異世界への転移が話に入つてくる。

一頻り自分への怒りを爆発させた後、ふと「もしやクローネだけが消えたわけでは無いのか?」とモモンガは考えた。

転移した理由も原因も分からぬ以上、何も欠けることなく転移したと誰が言い切れようか。

気付いていないだけで他のN P Cにも影響が出てるかもしれない、急いでクローネと同じように消えた者や物がないか、手の空いてる者に総出で確認するよう指示を出したのだ。

「ナザリックの配下全員の無事を確認しました。アイテムや家具、個人所有の装備も全て所定の位置にあることを確認済みです——ただ一つ気になる事が」

「？」

「ワールドアイテム『聖杯』<sup>ホーリーグレイル</sup>が宝物殿に返還されていないとの事でした。あれはクローネ様が身につけているものですが、念のためご報告をと」

「何？」

モモンガは目元を覆っていた骨の手を浮かせる。

それはかつて敵対ギルドから略奪したワールドアイテムだつた。

『聖杯』<sup>ホーリーグレイル</sup>は本体に蓄積したデータ量を捧げ、いくつかの条件と手順を踏むことで“何かが起こる”アイテム。

というのも肝心の効果が“発動させた後にしか分からない”仕様であり、消えることは無いにしろ一度使つてしまえば気が遠くなる量を貯め直すことになる。

発動時に要求されるデータ量は鉱山一つ占拠して入手できる『熱素石』<sup>カロリックストーン</sup>をゆうに凌ぐことから、強力な効果を持つてていることは分かつていたが、結局使い所がなく襲撃成功の記念トロフィーとして肥やしになつていた。

(すっかり忘れてた……詳細不明のワールドアイテムなら、不可解な点はあるけど最低でもナザリツクの転移阻害を通り抜けるくらいなら出来るかもしけないな)

本来ギルメンの承認が必要なアイテムをクローネに装備させていたのには理由がある。

漠然とした効果が争いの種になることを危惧したメンバーが多数決をとり、ギルド長のモモンガに使用権を丸投げしたのだ。

押し付けられたモモンガはギルドに何かあつた時の切り札として使う事を前提に、副次効果の「回復魔法を使う度にMPが回復する」のみの使用とし、手順の一つである『祈りコマンド』を使えないクローネのロマンビルドの強化に使うことで話を終わらせた。

最後に見たのはいつだつたか、1人になつてからクローネの持ち物を弄つた記憶はない。

「クローネがナザリックから出るために使つたのか……？」

何故、起動したのかは分からぬがクローネの願いがトリガーになり、それを叶えたとしたら果たして何処へ行つてしまつたのか。遠距離の探知を透過する指輪を付けているから魔法での探知はまず無理だ。

謝るどころか居場所も分からぬ絶望的な状況に、モモンガはまた目元に手を当てて項垂れた。

泣きながらナザリックを去るクローネの姿を思い浮かべてしまう。

「モモンガ様、無礼を承知で申し上げたい事がござります」「許す、言つてみろ」

「もし……」自身の意思で出ていかれたのなら、それはクローネ様がナザリツクを裏切った……という事でしようか」

突拍子もない発言だったがアルベドは真剣だった。

「いくらモモンガ様のご息女であっても最低限の勤めというものがござります、それを放棄していい理由が存在するとは思えません」

確かにクローネに思うところはあるがそれとこれとは話が別。ナザリツクを預かる守護者統括として、創造された者として支配者のモモンガに死ぬまで仕える義務がある。

立場は違うが同じ使命を持つていては必ず相手が責任を放棄するのは生みの親への裏切りに他ならない。

しかしそれを聞いたモモンガは肩を揺らして低く笑う。

「はははははは、本当にそうだとしたら幾らかマシだつたろう。いつそ裏切つて気が済むのならそうして欲しいくらいだ」

「いつたい何を仰るのです、この世で最もいと尊き御身に反目するなど……」「お前の顔など見たくもない」

振り向いたモモンガ的眼光に射抜かれた。

ヒツ、とアルベドが短く悲鳴を上げて恐ろしいものから身を守るように後退る。

「……まあ少し違うが、似たようなことを私は言つたのだ。それをどう受け取るのかお前にはよく分かる筈だが」

「…………」

胸に手を当てて俯いたアルベドの沈黙がその答えだつた。

すっかり勢いを失つた彼女を見てモモンガはベッドから腰を上げて歩み寄る。目尻に浮かんだ涙を指で掬い、可憐な肩に手を置いた。

「お前の忠誠心は理解しているつもりだが、あの子は何も悪くない。分かつてくれるな」

「はい……憶測でありもしない疑いをかけた愚かな私をどうかお許し下さい」

「ああ、全て許そう。酷いことを言つてすまなかつた」

「どんでもございません！　与えられた慈悲に相応しい働きをしてみせます」

頷いたモモンガはこう続ける。

「まずはこの世界についての情報収集から始めるとして、ナザリツクの防衛の件もあるからな。

同じ世界にいるなら何処に居ようと何年かかろうとクローネは絶対に探し出す。

あの子が無事ならそれでよし、だがもしそうでなかつたら——我らがアインズ・ウール・ゴウンの名を知らしめる時が来るだろう

「！」

眼窓から覗く赤い光が、思い浮かべた最悪に反応しジリジリと光つた。

だが、これは見えない敵に責任転嫁をしているだけだと気付いて頭を振る。

「いや、元はと言えば俺のせいだ、連れ戻して謝らなければ何も始まらない。力を貸してくれるかアルベード」

「はい。如何様にもこの身をお使い下さい、モモンガ様」

霸気に翼を震えさせてうつそりと笑うアルベードを連れ、モモンガは今後の方針を話すべくデミウルゴス達の元へ向かつた。



数日後。

リ・エスティーゼ王国、王都中心部ロ・レンテ城。

「では打ち合わせ通り頼むぞ」

「うん、頑張る……！」

控えていた兵士が扉を開け、2人の姿が貴族と王の前に晒されるとざわめきが走つた。

ガゼフはいつも通りの鎧姿だったが、もう片方は年端もいかない少女であり王国では

まず見かけない容姿。

身に纏う白い革で作られた軽鎧に、裏地を赤で染めたシミひとつない白いマント姿も珍しく、剣を携えた姿は異国の冒険者という言葉が相応しい装いだった。

2人は向かい合う貴族の中ほどで足を止め、その場に跪く。

「面をあげよ」

王座に座る国王ランポッサ3世の許しを得て顔を上げた。

「戦士長 此度の任務ご苦労であつた。

討伐したとは聞いているが、何があつたのか改めて聞かせてくれ。

……だがその前に、そちらの御仁の名前を聞こうか

ガゼフに目配せされ、一礼する。

「お初にお目にかかります、国王陛下。

わたしは旅の魔法詠唱者マジックキヤスター、クローネと申します」

## 忍び寄る魔の手

クローネの挨拶を受けたランポッサが遠路はるばるやつてきたことを歓迎すると、彼女がここに居る理由へと話が移つた。

それを説明するためガゼフは襲撃された村々の被害状況、そして今回の事は帝国兵に成りすました法国の工作員によるもので、全て自分をおびき出す罠だつた事を報告する。

「法国の特殊部隊との戦闘で窮地に陥り、そこをこの御仁、クローネ殿のご助力で討伐する事が出来ました。

彼女の力が無ければ私は此処に居なかつたでしょう」

「そうか……」  
ランポッサが発した一声はただの相槌だつたが、安堵と後悔が滲む複雑なものだつた。

「我が忠実なる戦士長に加勢し、民を守つてくれた事に心から感謝する。クローネ殿」

「勿体なきお言葉です、私の力が少しでも役に立つたのであればそれに勝る喜びはござ

いません」

格式張つた返答とは裏腹にやわらかな笑顔で返したクローネを見てランポッサも小さく笑みを浮かべる。

非の打ち所ない流れるような所作と言葉遣いに、粗相をしようものなら何処の田舎者かと笑うつもりだつた幾人かの貴族が舌を巻いた。見目麗しいだけの小娘では無く十分な教育を受けた事が伺える。

しかしそこに太い声が割つて入つた。

「それにしても、王国が誇る戦士長ともあろう者が旅人の力を借りる事態になるとは」顔に残る傷跡と声のハリがかつての勇猛さと威圧感を醸し出す男、貴族派閥のトップであるボウロロープ侯が跪く2人を横目で見下ろした。

「何を言う、元を辿れば王国の至宝を持ち出さぬよう言つたのはあなた方ではないか」

「それは戦士長殿のお力を信じての事、まさか魔法などを使う軟弱な輩に苦戦するとは予想を超えておりましたな」

王派閥からの指摘にも他の貴族がふてぶてしく反論し、王座の間にピリピリとした緊張感が漂う。話題の中心であるガゼフは口を一文字に結んで表情を表に出さないようにならなかった。

任務の失敗は回避できだが、王を貶める材料としては十分な結果になつたため、確実

にそこを突いてくるだろうと予想するのは難しくない。ガゼフを通して助力したクローネを攻撃してくることも。

(やはりこうなるか、分かつてはいたが)

こうもあからさまな態度を向けられて萎縮していないか心配になつたガゼフが隣を伺うが、クローネは先程と全く変わらずに平然としている。

「どうでしようか、私はそうは思いませんが」

「ん？　ああ、貴殿は元オリハルコン級冒険者を雇つていいのだつたな」

貴族派閥側に立つ六大貴族の一員、レエブン侯が頷いた。

「ええ、魔法も使いようによつては侮れぬもの。個人的には、戦士長殿を追い詰めた術者達がどの程度の使い手だつたのか興味がありますね」

レエブン侯の蛇のような鋭い目を追つて、様々な意図を含む視線が2人に集中する。軽視こそしていないもののガゼフの魔法への知識は貴族達とさほど変わらない。この場にいる唯一の専門家に説明を求められていることは明白だつた。

「敵方は第3位階の召喚術を操る魔法詠唱者、それも単なる物理攻撃では倒しきれないモンスターを揃えて来ていました。

王国戦士団よりも少数でしたが、それでも匹敵する練度を有している部隊と言つて良いと思います」

「はっ、たかだか魔法一つで大袈裟な、力で押し切つて仕舞えば良いでは無いか」「お言葉ですが、鉄を包丁で切るようなものです。いくら力があつた所で刃が通らなければ意味がないのではないでしようか」

吹けば飛ぶような幼い外見からは想像もできない、控えめでありながら鋭い切り返しは、野次を飛ばした貴族を言葉に詰まらせた。

「それに相手方の切り札は第7位階魔法で召喚された天使、拝見した戦士長様の装備では届くどころか折られていたことでしょう」

「第7位階……」

険しい表情で呟いたレエブン侯に、様子を見ていたボウロロープ侯は片眉を上げた。

「これは同じ魔法詠唱者としての所感ですが……物理攻撃への対策といい、切り札といい、相手は戦士長様を確実に殺す算段を整えて来ているように見えました」

クローネの推察は派閥に関わらず貴族達をざわつかせた。

一見すれば、王の信頼を得ているガゼフが死亡することで貴族派閥の有利に働くとも見えるが、それは違う。

今回の一件は帝国の侵攻により徐々に国力を削ぎ落とされている中でも、己の勝利を疑わぬ愚鈍さを持つていてからこそその慢心と、権力争いが招いた事。

貴族派閥からすれば王位継承権第1位のバルブロ王子を王に据えてしまえば、王に仕

える身であるガゼフは手中に収めたも同然。置いておくだけで帝国への圧力になる駒をわざわざ殺す必要は無い。

ただ、祖国を裏切り小金を稼ぐような真似をする輩がいなければの話だが。

「戦士長」

「はい、私もクローネ殿と同意見です。法国があれ程の戦力を有しているとは予想外でした」

ガゼフの言を『己の力不足の責任転換』として取つた貴族派閥のリツトン伯が口を挟もうとしたが、ボウロロープ侯に視線で遮られた。

「よろしい。では旅の魔法詠唱者マジックキャスタークローネ殿の今回の功績を認め、王国に滞在する間は客将として迎え入れる」

「なッ」

六大貴族を除く貴族達は王の決定に絶句した。それを意に返さず、ランポツサは秘書官に持たせていたものをクローネに渡すよう言う。

「それとは別に、僅かだが此度の働きへの褒賞を用意したので受け取つてくれ」「お心遣いに心からの感謝を申し上げます、陛下」

「お待ちください！ 素性が明らかでないものを王城に迎えるのですか！」

金貨の入つた木箱を受け取つたクローネが深々と頭を下げるが、悲鳴のような声を上

げて貴族が反発する。

問いかけられたランポッサは顔色を変えずに言い放つた。

「此度の襲撃には法國によるなんらかの思惑があつたことは明白である。その尻拭いを異国の旅人にさせておいて、何もしないというのは王国の品位に関わるであろう」

「ですが、」

「恐れながら陛下、その事なのですが」

食い下がる貴族を遮り、ガゼフがクローネを我が家に招きたいと切り出した。

「クローネ殿は遠い親族を頼つて旅をしてきた身。

せつかく会えた所で離れて生活するのは心細いでしょう、僭越ながら両名を我が家で持て成そうと考えております」

「ふむ……それもそうだな。ならばそのように、我の代わりに頼んだぞ」

「承知しました」

「もちろん言つた通り客将として王城に出入りする身分は与える。お主達の懸念は分かつてゐるつもりだが、正式に召し上げると決まつたわけではなく、なんの権限も与えられるつもりはない。他の者も留意せよ」

「……畏まりました、陛下」

何時になく強気な王に貴族は頭を下げるしか無かつた。

ランポツサが貴族からガゼフとクローネへ視線を移す。

「戦士長、今日はもう下がつてよい。クローネ殿をよく持て成すように」「はっ、失礼します」

権力者たちの争いが渦巻く王座の間から退出した2人は黙つて歩みを進め、誰もいない廊下に出たところで揃つて息を吐いた。

「なんとか打ち合わせ通りにいったね」

「ああ、上手くいって良かつた。こちらの都合に付き合わせてすまない。  
しかし驚いたぞ、あそこまで弁が立つとはな」

「えへへ」

照れたように可愛らしくはにかむクローネの変わりようにガゼフは感心する。

そう、全てはガゼフを初めとした王と王派閥の作戦だつた。

というのも、今回の一件は貴族派閥からすれば敵に対する見込みの甘さ、王派閥からすれば王国戦士団の力量不足と、どちらも突かれれば痛い腹がある。後者は足を引っ張られた結果であり理不尽とも言えるが、派閥が完全に二分することを避けたい王にとつては言及することが出来ない。

そこで無理解であるが故に王も貴族も口を挟めない“魔法”的観点で、完全なる第三

者であるクローネが証言をし、どちらの急所も浮き彫りにして着地させたのだ。

現に途中から気付いたボウロロープ侯は何食わぬ顔で聞き流していたことから、誘導は上手くいったと見て良い。

そして今回協力することでクローネは王という後ろ盾を得ることになった。正式に召し上げられてはいないので、ガゼフよりも政治的に微妙かつ弱い立場ではあるが、身の安全を保証する分には機能するだろう。

「だが念の為、レエブン侯の顔と名前は覚えておいてくれ、今回はこちら側についてくれたが……何か良からぬ手を打つてくるかも知れない」

「え？ う、うん？」

不思議そうに首を傾げたクローネを安心させるように白い頭を軽く撫でる。

「ああ、そうだ、夕飯に副長を呼んでもいいか？ ゲルダには言つておいたんだが王に話を通してくれた礼をしたい」

「だつたら急いで誘いに行かなきや、おばあちゃんが美味しいシチュー作つて待つてるつて言つてたよ」

「それは一大事だな、早く帰ろう」

王座の間にいた時のようにキリツと表情を切り替えたのがおかしくてクローネがくすくすと笑い、おどけたガゼフも破顔する。

ちなみにクローネの親族とはゲルダの事。ちょうどガゼフが雇っていた老夫婦が故郷へ帰つたこともあり、クローネの希望を叶えるのに丁度良かつたので、ゲルダが家事を請け負うと申し出てくれたのだ。

元々平民出身で身の回りの事はこなせるガゼフは力仕事に抵抗がないため、特に問題がなかつたことも幸いだつた。

と、そこで廊下の向かい側からガゼフを呼ぶ声がかかる。

「戦士長様！」

歩み寄つてきたのは黄金の呼び名にふさわしい美貌を持つラナー王女。隣には護衛のクライムと、珍しくもザナック王子が並んでいた。

「これはラナー様、マジックキャスターお散歩中でしようか」

「はい、それに旅の魔法詠唱者様の事をお聞きして、お会いしたかつたので散歩のついでに立ち寄つてみたんです」

「そうでしたか」

キラキラと輝く瞳を嬉しそうに緩めてラナーは戸惑うクローネの手をとる。

金髪に碧眼、白髪に赤眼。手を取り合うラナーとクローネの色彩は正反対で、どこか神秘的なコントラストでその場を彩つていた。

「ご活躍は聞いています、私にも是非お話を聞かせて下さい。

友達のラキューは冒険者で魔法も使えるので、クローネ様が宜しければ今度お茶会をしませんか?」

「……え、あ、はい! わたしで良ければ喜んで、ラナー様」

ガゼフの顔色を伺い、問題が無さそうだと分かつたクローネが嬉しそうに手を握り返す。

異形種といえどクローネも女の子、同年代であり同じお姫様の友達が出来るかもしないまたと無い機会に小さな胸を踊らせた。

返事を聞いたラナーもニッコリと微笑む。

「それでは、落ち着いたら都合の良い日を教えて下さいね」

そのまま帰路に就いたガゼフとクローネをラナーは手を振つて見送つた。

「……ところでお兄様、お話をされないで良かつたんですか? ——お兄様?」

隣にいながら一言も喋らなかつた兄に話しかけたが、ザナツクは2人が去つた廊下の曲がり角を頑なに見つめ続けている。よく見れば頬は赤らみ、上目がちな目はらんらんと輝いていた。

「……………可憐だ……」

「まあ」

ぽろりと零れた一言。

ラナーはこの日初めて、人が恋に落ちる瞬間を目にした。



「ニグン・グリッド・ルーイン率いる陽光聖典が倒された、ですか」

スレイン法國、某所。

神官長に呼び出しを受けた漆黒聖典の隊長は、最高神官長の前で跪いていた。

「それも土の巫女によれば、ガゼフ・ストロノーフが威光ドミニオン・オーソリティの主天使を打ち倒したと」

「ああ、だがガゼフとニグンの交戦中に魔法に映らぬ何者かが割り込み、ガゼフに力を貸した事は分かつている。」

――これが由々しき事態であることは分かつているな?』

「我々が認知していない神人、あるいは他の“ぶれいやー”の子孫の可能性がある、とうことでしようか」

「そうだ、よつてお前に重要な任務を与える。」

――その何者かを一時的に洗脳し、我がスレイン法國へ連行せよ。真偽はどうあれ、それ程の力を持つてゐるならば破滅カタストロフ・ド・ラゴンロードの竜王の目覚めへの備えにもなる。

男であれば報酬を提示してそのまま戦力に、女であればお前の嫁にして子を産ませる

のも良かろう

「……お戯れを。此度の任務、拝命致しました」

「頼んだぞ、全ては六大神の、人類のための行いである」

そう言つて神官長は隊長を王国へと差し向ける。

その途中で一行は思わぬ強敵と遭遇する事になるが、果たしてどう転ぶのか。  
クローネの預かり知らぬ所で着実に、有無を言わせぬ狂信者達の魔の手が伸ばされようとしていた。

# クレマンティーヌ、死す I

鮮やかなトマトのスープに人参やキヤベツなどの具材が浮かんでは沈み、表面には香味野菜の香りが移る、黄金色のオイルが食欲を誘うように光っている。

ゲルダはスープを小皿にすくって、少し冷ましてから味見をする。その隣ではクローネが固睡を飲んで見守っていた。

「——まあ！ とつても美味しいわ」

「ほ、本当？」

「本当よ、クローネちゃんは料理も出来るのねえ」

「えへへ……うん、コツクの職業も取つてたから」

ゲルダに満点を貰つて安心したクローネは胸をなで下ろしてはにかんだ。

職業「コツク」はバフ効果を持つ料理を作れる職業だ。

スキルによる生成は回数制限こそ設けられているがMPを消費しないので、アタッカーやタンクを強化する事前準備に適した職業の一つ。

特に魔法と共に存するバフが盛れて、種族を問わないのも強みだろう。

更にクローネはとあるメンバーの仕込みでギルドのメンバーの名を冠す “4-1の料理” を覚えさせられているとかいないとか。

「ガゼフさん、喜んでくれるかな」

自信をつけたクローネが期待を込めて咳き、それを聞いたゲルダはふふふと笑った。王国でも指折りの人格者として知られる戦士長が心を込めた手料理を喜ばないはずがない。目に見える結果をわざわざ茶化すような無粋はすまいとさりげなく口を抑えられた。

そうやつて2人が話してると、階段を降りる足音が聞こえてきた。

「おはよう、クローネ、ゲルダ」

「おはよう、ガゼフさん」

「おはようございます。洗面用の水は用意しておきました、お洋服も置いてありますよ」

「ありがとうございます、助かる」

素朴な私服姿で降りてきたガゼフはそのまま洗面所に向かい、ゲルダとクローネは朝食作りを再開する。

ガゼフが身支度を整え正装に着替え終わる頃には、リビングのテーブルに朝食が並べられていた。

3人が揃つて席に着き、食事を始める。

使用人ならば席を外さなければならないが、家事を任せていたも2人は客人として迎えてるので「どうか我が家のようにくつろいで欲しい」とガゼフから先に断つておいたのだ。

それにしても、と並べられた料理を見てガゼフは思う。ゲルダがここまで料理が出来るとは予想外だつた。王国で美味しい飯を出す店を上回る味に思わぬ幸せを感じる。

(昨日のシチューとチーズも美味かつたが、今日のも一段と美味そうだ)

スプーンを手に取り、まずは良い香りがするスープを口に運んだ。

「美味い……」

野菜から出た甘みだろうか、トマトの酸味を抑えて旨味に変えている。ほんの少しピリリと舌を刺激する香辛料が良いアクセントになつていて。控えめに言つて絶品だつた。

あつという間に平らげたガゼフに、正面に座つていたクローネはパアアつと表情を明るくしてゲルダを見る。

ゲルダは微笑み返して、2人の様子にハテナを浮かべるガゼフへ説明した。

「うふふ、そのスープはイチからクローネちゃんが作つたんですよ」

「なに、そうなのかな?」

「おばあちゃんのお手伝いがしたくて。本当に、本当に美味しい?」

奇跡のような魔法を使う魔法詠唱者でありながら、王の御前にあつて貴族相手に1歩も引かず、更にはこんなに美味しい料理まで作るのか。

もじもじと照れたように頬を染める姿は年相応だが、その多才ぶりにガゼフは驚かされてばかりだ。

「ああ、とても美味しかった、もう一杯貰えるか」

「うん！——あれ、その指輪」

ステップ皿を受け取つたクローネは、ガゼフが左手の薬指に指輪をはめている事に気が付いた。

「ガゼフさん、結婚してたの？」

「!? い、いや、そういう相手はいないが、どうしたんだ急に」

「えっとね——」

ユグドラシルのNPCは、運営されていた22世紀の常識が多少反映されている。

世界観を壊すような現代の特有の知識はプレイヤーに聞くか、アーカイブを見るなどでしか知る術を持たないが、結婚の文化は常識として組み込まれているらしい。

「わたしの住んでいた所では、結婚したら左手の薬指にお揃いの指輪を着けるんだよ。王国にはそういう風習つてないの？」

「そんな話は初めて聞いたな」

「でも素敵ね、私も夫が生きていたらお揃いの物を身に付けて一緒に歩きたかったわ」「薬指に指輪を着けるのは愛の絆つて意味があるんだって」

「まあ、ロマンチックねえ」

話を聞いたガゼフは何かを考えるように指輪を見つめ、しばらくしてから視線を外した。

おかわりを持つてきたクローネからステップを貰つて今日の予定を口にする。

「俺はこれから仕事だが、クローネはエ・ランテルに行くんだつたな。」

王の印が入った身分証があれば何かあつても対処出来るはずだ、忘れずに持つていくんだぞ」

「うん、気をつける」

クローネは客将としての身分を与えられ、ガゼフの家でお世話になつてゐるが、全てナザリックへの帰り道を探すためだ。

転移したゲルダの村からほど近く様々な情報が行き交うエ・ランテルに赴くことは昨日から決めていた。

ゲルダからある程度の常識は教わつたので、まずは冒険者組合長のプルトン・アインザックを訪ねるつもりでいる。

普通に行けばエ・ランテルまでは数日かかつてしまふが、王都へ向かう最中に一度

寄つたので、こんなこともあろうかと記憶しておいたのだ。

（テレポーテーション）  
転移を使えば日帰りで帰つて来れる。

（何か手がかりが見つかるといいな）

その情報収集の帰り道で思わぬ“拾い物”をする事になるのだが、今のクローネには知る由もなかつた。



エ・ランテルのとある裏路地で女が一人、死にかけていた。

濃い色の金髪は血に染まり、革鎧に付けていた色の違うプレートがそこら中に散らばつている。

白い腹に空いた穴からドクドクと赤黒い血が止めどなく流れ、充血した殴打痕が痛々しく残つていた。

（クソッタレが……）

女の名前はクレマンティーヌ。かつてスレイン法国の漆黒聖典に所属してた戦士であり、秘密結社ズーラーノーンの幹部。

法国の秘宝である『叡者の額冠』を餌に、送り込まれる追つ手を逃れるつもりだつた

が、思わぬ人物と再会してしまった。

（クソ、クソ、クソッ！　なんでコイツがここに居るんだよ、神器を守るのが任務だろうが！）

クレマンティーヌを襲つたのは法国屈指の暗殺者、漆黒聖典第十二席次「天上天下」。その隠密能力の高さは、神人を抜けば人類最高峰の戦士の探知を潜り抜け、完全に不意をつく形で腹を貫いた。

深手を負いながら抵抗するクレマンティーヌを死なない程度にいたぶり、何やら情報を吐かせようとしている。

（“ガゼフ・ストロノーフに加勢した魔法詠唱者”なんて知るわけねえだろ……！）

闇に潜み暗躍していたクレマンティーヌがカルネ村で起こつた出来事に興味があるはずもなく、王城に客将として招かれた魔法詠唱者がいることを知る人間をエ・ランテルで探す方が難しいだろう。

十二席次も有力な情報を得られるとは思つていなかつた。これはただ、風花聖典が探していた裏切り者をたまたま見つけたので、任務のついでに半殺しにして聞いてみただけだ。特に意味はない。

逃げられるのも面倒なので、一度気絶させてから引き渡す。奇つ怪なマスクの下でそう決めた十二席次は、クレマンティーヌの首に指をかけようとした。

ふつ、と手甲に血が吐かれる。

見れば死にかけの裏切り者は、未だ反抗的な目でこちらを見ていた。

その恩恵を受けていた立場でありながら、あろうことか神が残した遺物にこの女は唾を吐いたのだ！

鈍い音が裏路地に響く。何度も何度もその音が続き、辺りに血が飛び散った。

馬乗りになつた十二席次の拳がクレマンティーヌの整つた顔を歪めていく。

（お前は暗殺者のクセに沸点が低いのが弱点だつたよなあ、風花聖典の性悪根暗共に拷問されて命乞いするくらいなら……こつちの方がマシだ）

天上天下に繋がる言葉は唯我独尊。

この世界の人間には知りえない繋がりではあるが、皮肉にも悪い意味でその言葉を表している十二席次はプライドも自己評価も高い男だつた。

自分と自分が信仰する神を侮辱されると、今のように烈火のごとく怒り狂う。

クレマンティーヌはその性格を利用した。

『収者の額冠』は既にズーラーノーンの手にあり、使わせる人間の目星もつけている。

手がかりをみすみす殺せば叱責は免れないだろう。

どうにもならないならせめて、うつかり殺してしまつたマヌケの烙印が押される手伝いをすることで、溜飲を下げることにした。

(あーあ……こんなことなら、あの情報屋で……もつと遊んで……おけば……良かった  
……なあ……)

意識は遠くなり、思考が途切れていく。

殴られすぎて痛みなどとつぶに通り越した。

怒りが治まらない十二席次の、腹を貫いた手刀が心臓目掛けて振り下ろされる。  
(……死にたく、ない)

元漆黒聖典第九席次「疾風走破」と呼ばれたクレマンティーヌは心臓を突かれ——絶命した。

興奮状態から我に返った十二席次は自分が犯した失態に気が付いた。いまの法国には蘇生魔法を使える者がいない。その動搖が周囲への警戒を薄れさせる。

そこに飛び込んできたのは死角からの一撃。くぐもつた音を鳴らしたその強打は、攻撃されたことすら認識させずに意識を一瞬で刈り取った。

どしゃり、と横に倒れた崩れ落ちた十二席次の後ろで、風景が陽炎のように揺らめく。  
「はあ、はあ、はあ…………や、やつた?」

十二席次を襲つたのは木の棒を構えたクローネだつた。

忘れがちだがクレリックは前衛魔法職、その物理攻撃力はモモンガより上である。

◆◆◆

「それで連れて帰つてきたと」

「…………はい」

ガゼフ家の一室で緊張した様子のクローネと、腕を組んで険しい表情を浮かべるガゼフが向かい合う。

視線の先には、寝台代わりの長椅子に置かれた女の遺体、心臓を貫かれたクレマン

ティーヌが血を拭われた状態で横たわっていた。

クローネがクレマンティーヌを拾つてきた経緯を説明するには、少し時間を遡る必要がある。

# クレマンティーヌ、死す II

朝食を食べてガゼフを見送った後、クローネは直ぐにエ・ランテルへ向かつた。

冒險者組合へ行つたは良いものの、運悪く組合長は不在。

代理の人間に話を聞いてもめぼしい情報はなく、徒労に終わつてしまつた。ゲルダから周辺の地理を聞いても見知らぬ名前ばかり。

冒險者ならあるいはと思っていたが、ナザリック家があるヘルヘイムすら聞いたことがないと言われ、流れ者は口が堅いので同じように飛ばされてきた者がいるか、調べる事も出来なかつた。

「異形種がウジヤウジヤいる墳墓を探してます」なんて馬鹿正直に言つてしまえば人間の興味を引いてしまう。強そうには見えないが、相手はモンスター退治を請け負う冒險者。

そんな人間を家に招待するわけにはいかない。

あまりにも打ちのめされた顔をしていたのか、帰り際に力になれなかつたことを謝られ、説明に使つた地図と飴を貰つてしまつた。

用事は済んだので、自分が飛ばされた此処が何処なのかを考えながら宛もなく歩いていると、大通りから外れた裏路地に迷い込んだ。

引き返そうと踵を返したら、そこに金髪の女戦士とアサシン風の男がなだれ込んで来たのだ。

慌てて「不可視化」<sup>インヴィジビリティ</sup>で身を隠したので気付かれることは無かつたが、驚くことにアサシン風の男は、最近襲撃された村でガゼフ・ストロノーフに加勢した魔法詠唱者を探している」と言っていた。

クローネを探しているなら見た目の特徴を上げればいいが、それをしない。ということはカルネ村で起きた戦いを何らかの魔法を使つて見ていたのだろう。

こちらでは神話の領域らしい威光<sup>ドミニオン・オーソリティ</sup>の主天使をなぎ倒した瞬間もバツチリ見られたとしたら……

男の口ぶりから察するに、背後にいるのは法国で間違いない。

村を襲い、ガゼフを殺そうとした法国が、その妨害をしたクローネを探している。そして穏やかな理由では無いと察するには十分だつた。

なので男が油断した隙に距離を詰めて氣絶させ「殺した女戦士の死体は自分で処理した」と記憶を操作する。

そしてどうやら敵対してゐるらしい女戦士<sup>ブルーターテレボーション</sup>と「上位転移」<sup>ブレーカー・テレポートーション</sup>でガゼフ家に戻つてき

た。

蘇生して恩を売り、協力させるために。

経緯を聞いたガゼフは険しい顔のままクローネに問いかける。

「話は分かつた。敵の敵は味方と言うが——本当に蘇生するつもりか？」

「うん、このままだとわたしに辿り着くのは時間の問題だと思う。打てる手は打つておきたい」

「冒険者のプレートで自分を飾りつけるような人間に、話が通じるとはとても思えないが」

ガゼフの視線の先には銅や鉄のプレートで出来た小山がある。

女戦士を運ぶ前に痕跡は魔法で消し、証拠になるものは遺体と一緒に持つて帰った。彼女の鎧から弾き飛ばされた誰の物とも知れぬ冒険者のプレートも全て。

「クローネちゃん、」

後ろでハラハラと見守っていたゲルダが堪らず声をかける。

クローネは振り向き、申し訳なさそうに眉を八の字にした。

「この魔法は使わないので約束したけど、放つておいたら大変な事になるかもしね。おばあちゃんを危ない目にあわせたくないし……だから、ごめんね」

ゲルダとの約束を破つてまで女戦士を蘇生することにしたのは、法国の情報を得るためだ。

見るからに裏の人間だつた男に、裏切り者と呼ばれる女戦士ならば内情を知つてゐるはずだ。法国の実態を知れば、自ずとクローネが探される理由にも見当がつく。

それに自分を探してゐる事も気になるが、カルネ村で戦つた特殊部隊の指揮官はガゼフを殺そうとする理由を最後まで語らなかつた。

今まで明るみに出ることのなかつた圧倒的な軍事力を用いてまで、ガゼフを確実に殺す算段を整えた意味。

目的は戦争なのか、他の政治的な理由による物なのか。確かなのは王国に害意を抱いているということだけだ。

どつちにしろクローネは政治に入出来ないが、もし法国と戦争する事になれば、得た情報は対抗策を考える材料になる。それは戦場の最前線に立つガゼフの助けになるだろう。

もちろんリスクもある。女戦士の存在が前準備無しに貴族派閥に知られてしまえば、法国と繋がつてゐると言いがかりを付けられてもおかしくない。

だが法国に対しても何も備えないと云うのはそれ以上のリスクになる、そう考えた上でクローネは女戦士を拾つてきた。

探つてていることを相手に気付かれないよう情報を探るには、うつてつけの相手だつたからだ。

「そこまで頭の固いおばあちゃんじやないわ。……必要なことなのよね」

ゲルダの言葉に頷き、ガゼフに向き直つた。

「まずは説得、それでもし協力しなかつたら――――その時はわたしが責任をとつて殺すよ」

後ろでゲルダが息を飲む音が聞こえる。クローネの静かに射抜くような赤い目が、ガゼフの柴色ふしいいろの目と交差した。

しばらく睨み合いが続き――折れたのはガゼフだつた。

「そこまで言うなら任せる。法国の動きが気になるのも確かだからな。

だが君にだけそんなことをさせるつもりは無い、今度は俺も背負おう」

ガゼフは険しい顔をやめてただ真剣な表情で言つた。

カルネ村での出来事を思い出し、緊張が解けたクローネは心強い味方に少しだけ笑みを浮かべる。

相手を警戒させないために、ゲルダとガゼフを部屋から出し、一呼吸置いてから魔法の詠唱を始めた。

(利害は一致するはず、あとはこの人とわたしの説得次第)

トゥルー・リザレクション  
「眞なる蘇生」



とても深い眠りから優しく揺り起こされるような、そんな感覚がクレマンティーヌを包み込んでいた。

絵に書いたような優しい母の腕に抱かれ、目覚めへと導かれる。

成人なんてとつこの昔に過ぎていて、弱者をいたぶることに快感を覚える自分には縁のないものだ。しかしども心地いい。

ずっとこのまでいたいと思うほどの安らぎだったが、導かれるまま目が覚めてしまい、泡沫うたかたへと消えてしまった。

「あの、大丈夫ですか？」

「…………」

横に目を動かすと、白い革鎧を着込んだ見知らぬ少女。

そういうえば自分は死んだのは無かつたか。あのクソ十二席次に殴られた最後の方はほとんど意識が飛んでいたが、胸を貫かれたのは覚えている。  
「蘇生を施しました、何か違和感はありませんか？」

「今、アンタがやつたの」

「はい」

死者を生き返らせるのはクレマンティーヌが知る限り高位の魔法だ。他の国と比べて魔法が普及している法国でも、過去に到達した魔法詠唱者は数少ない。

ボロ雑巾になつた面識のない自分に、理由はどうあれそんな魔法を目の前にいる少女は使つてくれたらしい。

「…………天使？」

「え？」

クレマンティーヌは六大神なんて信じちゃいない。居たとしても自分には関係の無いことだ。法国のために尽くしても兄にも化け物にも勝てないままだった。

だがしかし突然降つて湧いた奇跡に、最も近しい言葉がそれしか思い浮かばなかつたのだ。

一方クローネは、全く予想していなかつた質問に異形種だと見抜かれたのかと心臓が口から飛び出そうになつたが、全くの的外れだったので慌てて否定した。

「いえそんな！ 異形種だなんて、普通の人間です。……あの、本当に大丈夫ですか？」どうにも格好と死ぬ直前の言動からは予想してなかつた態度だ。様子がおかしいので一旦落ち着いてから話し始める事にした。

「へえ、それで助けてくれたわけ。いいよー、協力してあげても」

(あつさり言うなあ……)

「さつきガゼフに協力しなかつたら殺すとまで言つておいたのに、二つ返事で了承された。なんだか肩透かしである。

「話を持ちかけたのはわたしですけど、そんなに軽く請け負つていいんですか」

「まあ、利害が一致してて都合が良いのもあるけど、恩返し」

「お、恩返し」

話していく分かつたが、どうやら完全に見た目通りの性格という訳ではなさそうだ。本人から自己申告された、弱いもの虐めが好きなのは本当だつたが。

「安心してよ、あのクソと法国を影からおちょくれるなら手を貸すし、クロちゃんのこと裏切つたりしないからさ」

協力関係は結べたが、妙に好意的でクローネはなんだかとても不安になつてきた。

悪い意味でその予感はこの後当たつてしまう。

「——そういう訳でガゼフさん、その……協力してくれることになつたクレマンティーヌさんです」

「もう、クレマンティーヌで良いって」

ゲルダは気を紛らわせるため家事をしに行き、1人で待っていたガゼフが部屋に呼ばれた。

扉を開けてまず目に飛び込んで来たのは、気まずい表情を浮かべたクローネに絡みつく、冒険者狩りの女の姿。

あの後に何があつてこんなことになつてているのか、それに気を取られたガゼフは話を聞き逃した。

「すまん、話が頭に入つてこなかつた。後で聞こう。

それよりもクレマンティーヌと言つたか、今すぐクローネを放してくれないか

「はー? いいでしょ別に、何もしないしくつ付いてるだけじゃん、ウツザ」

(イラツ)

普段温厚なガゼフには珍しく瘤に障る相手だつた。

王国の冒険者を手にかけたかもしれない人間が、命の恩人であり自分を慕つてくれる子供に馴れ馴れしく触つてているのを見ると、非常に苛立たしい気持ちになる。

「俺はまだ認めた訳じやない。冒険者のプレートのこともある、お前がクローネを害さない保証がどこにあるんだ」

(イラツ)

クレマンティーヌが相手にイラつくことは珍しいことではないが、恩人に手をかけると疑われて良い気はしない。

何より聞けば相手も同じくクローネに助けられた人間だ。自分のことを棚に上げて何を言うのか。

「あ？ それはそつちも同じことだろ、この子の弱味につけ込んで利用しようって腹なんじやないの？」

「そんな事は考えていない、それはお前のことじやないのか」

「…………」

「…………」

睨み合うガゼフとクレマンティーヌ。体格差はあるが、迫力ではどちらも負けず劣らずだ。

2人はお互いの目を見て直感した「絶対コイツとは気が合わない」と。

「あの……2人とも、喧嘩は程々に」

「無理」

「無理だ」

「そ、そつか、じゃあしようがないね」

にべもなく断られ即座に折れたクローネ。クレマンティーヌの腕の中で2人の後ろ

に雷が落ち、熊と虎の幻覚が見えた気がする。

ナザリツクで幾度も見た光景に心の中で父親に助けを求めた。

(うう……まるでたつちさまとウルベルトさまみたい、パパはこういう時どうしてたつけ)

ガゼフ家に新たな居候としてクレマンティーヌが加わり、法国の追つ手を警戒しつつ生活することになった。

ますます家への道のりが遠くなつたと感じるクローネだつたが、彼女の知らないところで着々とナザリツクは動き始めている。

再会する日はそう遠くないかもしない。

# 冒険者モモンとクローネ

「キラキラと輝いて、宝石箱みたいだ」

出立前に一人で過ごしたかつたのをデミウルゴスに見つかってしまい、モモンガは少し複雑な気分のまま外に出たが、目の前に広がる見事な星空にあつという間に心を奪われる。

「——あの子もこの空を見ているだろうか」

気分転換のつもりで外出したはずが、口をついたそれにモモンガは自己嫌悪に駆られた。

クローネの事のことばかり考えてはいられない。この世界を知り、大切な仲間達が残した子供達を守ることも同じくらい大事なことだ。

そこを疎かにしてはクローネの二の舞になつてしまふ。

「ええ、きっと見ていらっしゃいます」

それを知つてか知らずか、デミウルゴスはモモンガを労わるように、また自分に言い聞かせるように言つた。

「この世界が美しいのは、宿した宝石のその一つがクローネ様だからでしよう。

モモンガ様のお望みとあらば、ナザリック全軍をもつて手に入れて参ります」

それは宝石を世界に例えた、美しくも不遜な言葉遊びだつた。

ふつ、と笑おうとした時、デミウルゴスがかつての親友の姿と重なる。

——ユグドラシルの世界の一つぐらい、征服しようぜ？

仲間達とそう語り合つたウルベルト。

あの時は「随分大きいことを言うものだ」と徹底したロールに関心しただけだつたが。

(アイinz・ウール・ゴウンの力がこの世界に行き届けば、何処かに行つてしまつたク

ローネを探すのも無理な話じやない)

「世界征服か、それも良いかもしれないな」

「——!!」

(ま、そんなこと出来るわけないけど)



今後の方針を階層守護者に伝え、この世界の情報を求めて準備を始めたナザリック。大墳墓の防衛を守護者統括アルベドが指揮し、この手の探索で一番経験豊富なモモン

ガと護衛のナーベラル・ガンマが、名を変え旅人として情報収集することになった。

妻として反対するアルベドを落ち着かせ、緊急時の動き方や旅の準備をしていたら、出立するのに時間がかかってしまったが。

こちらの世界の文明レベルを調べるために『遠隔視の鏡』<sup>ミラー・オブ・リモート・ビューリング</sup>で観察していた村がナザリックに一番近かつたため、まずはそこに向かい、話を聞くこととしたモモンガとナーベラル。

モンスターにでも襲われたのか半壊した家屋が目立つその村。さつそく旅人のモモンとナーベとして接触し、力仕事などを手伝う交換条件として数日の滞在と、この地方の基本常識を教えてもらう契約を取り付ける。

途中、村に訪れた薬師の少年ンフィーレアとその護衛「漆黒の剣」を名乗る冒險者チムにも出会い、村人が知らないこちらの事を色々と教えてもらつた。

得た情報を元に待機していたセバス達へ指示を出し、この世界の様式に馴染むためコミュニケーションを交わす日々。

貴重な薬草の採取を手伝つた際に、森の賢王と呼ばれる巨大なジャンガリアンハムスターを気まぐれに手懐けたら、思いがけずクローネの手がかりを手に入れた。

情報源はこの村で一番初めに出会つたネムという少女。

出会つた当初はフルプレートを着込んだモモンガに怯えていたが、森の賢王を従えた

のを見て弟子入りを懇願してきたのだ。「自分もあの白い剣を振る女の子のように強くなりたい」と。

聞けば自分と姉を助けてくれた魔法詠唱者マジックキャスターの少女も同じように森の賢王を従えたのだと言う。

名前は知らないが、赤い瞳とやや濃い色の肌をした女の子だつたと。

探している愛娘とピッタリ当てはまる特徴にモモンガの眼窩から光が消えた。急いで事を使損じる。その通りに行動したつもりが、最も求めていた情報が目と鼻の先に転がっていたことに気付かず、端的に言えばショックだつた。

フードを被つていたらしく他の村人は治癒魔法を使う少女としか知らなかつたので、無理もないのだが。

隣で聞いていたンフィーレアにも弟子入りを頼まれたが受け入れるのは難しい。

かと言つて娘（と思われる少女）に憧れるネムを突き放す氣にもなれず、根負けして『ゴブリン将軍の角笛』を渡し「まずはそれで呼び出したゴブリン達と協力するところから初めて欲しい」と伝えた。

そしてどうやらアルケミストらしいンフィーレアには鍊金の確率を上げる『賢者の腕輪』を渡し、弟子入りは断つた。

手がかりを得たモモンガはすぐにでも飛んでいきたかつたが、クローネが戻ってきて

も人間社会に溶け込むモモンとしての姿は必要だ。逸<sup>はや</sup>る気持ちをグツとこらえて、王都に向かわせる予定のセバスにクローネを探させるようアルベドに伝えた。

特に人手が必要だつた大工作業はあらかた片付き、モモンガとナーベラルは別れを惜しまれながら、城塞都市エ・ランテルへと向かう。

同行する漆黒の剣とンフィーレアの紹介で森の賢王ことハムスケの魔獣登録と、冒險者登録を取り成してくれるとのことだつたので、文字が読めないモモンガは素直に甘えることにした。

そしてエ・ランテルに着いた矢先、ンフィーレアが何者かに撃われる。

モモンガ達に付き添つたペテル以外の3人が負傷する事態となり、たまたま一緒にいたンフィーレアの祖母リイジーに捜索の依頼を受けた。

彼に渡した『賢者の腕輪』を頼りに誘拐犯の居場所が墓地であることを割り出したモモンガは、協力を申し出たペテルを連れ、何故か大量発生しているアンデッドをちぎつては投げの大立ち回りを繰り広げる。

主犯とおぼしき魔法詠唱者とスケリトル・ドラゴンを討伐し、ンフィーレアも救出した。

冒險者になつて一時間足らずでエ・ランテルの危機を救つたモモンガとナーベラルは一躍脚光を浴びる。

その後も目ざましい活躍を続け、ただの冒険者から“漆黒”と呼ばれるアダマンタイト級冒険者に昇りつめた。



シャルティアが洗脳される事件があつたため、敵の存在を意識しながら冒険者業と支配者業に精を出すモモンガ。冒険者になつて1ヶ月が経とうとしていた。

セバスから上がつてきた情報でクローネらしき人物が王都で客として迎えられているのは知つている。だがナザリックの防衛強化に時間を割く必要があつたため、詳しい捜索は後回しにするしかなかつた。囮のセバスとソリュシヤンに接触させる訳にも行かず、モモンガ自身は依頼をこなして金銭を稼ぐのに忙しい。

それに全ては自分がしでかした事。喜んで手を貸してくれるだろうが、この件で守護者を頼り切るのは気が引けた。

だがクローネのことを考えて悶々とするのも今日で終わる。

急ピッチで來ていた依頼を消化したモモンガは、最後の依頼を終えたあとクローネを探しに行こうと考えていた。

「ナーベ、今日はこのまま王都へ向かう。お前も着いてこい」

「はい、モモンさ——ん」

(2、3日ぶりに聞いたな。これでも少なくなつた方か)

相変わらずの癖に諦めが漂うモモンガ。黙つて城門への道を歩いていると、なにやら人だかりが見えた。

「なんだ?」

人の隙間から覗き込むと3人組のチンピラが誰かに向かつて怒鳴つている。もつとよく見ようと顔を動かしたら、怒鳴られていた相手が頬を張られて倒れ込む。

その相手は、モモンガがずっと探していた愛娘のクローネだった。

同じく見ていたナーベラルも気付き、信じられない光景に目をカツと見開いた。

衝撃的すぎて頭が理解することを拒み、しばらくして事態を飲み込んだナーベラルは怒りと殺意に顔を歪め、剣の柄に手をかけた。

(モモンガ様には止められているけど、あの下等生物クソムシはクローネ様に触れただけでなく危害を加えた。——万死に値する)

一步踏み出そうとしたその時——隣から息が詰まるほどの殺気が噴き出した。

命の危機を感じる重圧。自分に向けられたわけでもないのに、ただ傍にいただけでナーベラルは恐怖で吐きそうになつた。

柄を握った手は震え、額から脂汗が出る。使つてない食道から何かがせり上がつてくるのを口を結んで耐えた。

恐る恐る隣を見ると、背中に背負つたグレートソードに右手を添えて、おどろおどろしい殺気を纏つたモモンガがチンピラに歩み寄ろうとしている。

（いけない、モモンガ様！）

一気に頭が冷えたナーベラルは主人の言いつけを守るため、震える手でモモンガの左腕を掴んだ。引き止める手に気づいたモモンガがヘルム越しにこちらを向く。何も言わないので恐ろしかった。

「……」は、人目が、あります……モモンさん、どうか……」

そもそも殺氣というものは感じる側の力量に左右されるものだ。幸い、取り囲む人間はこの殺気に気づいていない。

ここで人を殺してしまつては、今まで築き上げた英雄モモンとナーベのイメージが崩れてしまふ。いつもなら諫められる側のナーベラルだが、完全に我を失つた主人の殺気に当たられて同調するほど愚かではない。

1ヶ月の間、モモンガが叩き込んだ人間への対応がここで発揮された。

「…………お前の言う通りだな、すまない」

「いいえ、お気持ちちは痛いほどよく分かります」

ナーベラルの決死の嘆願は聞き届けられた。殺氣を四散させ、グレートソードから手を離したモモンガに安堵する。

未だ言い争う声を耳にしたモモンガはナーベラルに言付けた。

「今は殺さないがあの馬鹿共には痛い目にあつてもらう。

ナーベはここで見ていてくれ、あの子にお前の名前を呼ばれるのは避けたい」

「はっ」

本来、ナザリックを生きるものはモモンガに絶大な支配者のオーラを感じるらしいが、今はそれすらも探知出来なくなる効果の指輪をつけている。変装しているモモンガならばクローネに名前を呼ばれる事はないだろう。

後ろに下がったナーベラルを確認し、人混みをかき分けながらパキパキと指を鳴らすと、モモンガは娘に手を出した不届き者の背後に立つた。

冒險者くずれのチンピラに絡まれていたお爺さんを庇い、下手に出ていたら叩かれてしまつたクローネ。流石に手を出されても黙つていられないでの、どうしようかと考えていると、頬を叩いた男が視界から消えた。

残りのチンピラも左右に吹き飛び、残つたのは黒いフルプレート姿の偉丈夫。遠巻きにしていた群衆から歓声が上がり、チンピラを殴り倒したのがエ・ランテルで

話題のアダマンタイト級冒険者、漆黒のモモンであることを知る。

呆然としていると、目の前に黒い手が差し出された。

「大丈夫かい、お嬢さん」

クローネはハツとしてモモンを見上げた。モモンの声は、父が支配者として凄む時の声と似ている。

しかし見えるはずの支配者のオーラはなく、アンデッドの感知も働かず、別人かと少し落胆した。

「は、はい」

手を借りてクローネは立ち上がる。

殴られたチンピラは捨て台詞を吐いて一目散に逃げていき、庇っていたお爺さんはペコペコと頭を下げて、2人にお礼を言つて去つて行く。

お爺さんに手を振つていたクローネがモモンの方を見ると目があつた。

「えつと……モモンさん、であつてますか？ 助けてくれてありがとうございます」

「大したことはしていない、それよりも頬は痛まないか」

「これくらいなら平氣です」

「そう、か。なら良いんだ」

モモンもといモモンガは戸惑つていた。

たくさん話したいこと、謝りたいことがあつたはずなのに、いざ目の前にクローネがいると言葉に詰まる。思つていたよりも元気そうで、明るい表情と整えられた身なりからとても良くしてもらっているのが分かる。

それだけに自分が傷付けた事実は心に重くのしかかってきたが、それ以上に胸がいっぱいになり、感極まってしまう。

(良かつた……本当に無事で、良かつた……)

「モモンさん、よかつたらこれを」

「?」

クローネに差し出されたものは甘い香りのする包みだつた。モモンガの手の上に置くとやけに小さく見える。

「おばあちゃんと焼いたクッキーです。すみません、きちんとお礼ができるほど手持ちがなくて。

でもすごく美味しいので……モモンさん?」

突然ヘルムのスリットを手で覆い、空を仰いだモモンガにクローネが心配そうに声をかけた。

(いきますぐ連れて帰りたい……)

しかし今の自分は漆黒のモモン。未だ人目もある。

即座に背筋を伸ばし、咳払いで誤魔化した。

「んんっ！　これはありがたく貰うとしよう。だが冒険者として当然のこととしたま  
で、いつかこのクツキーの礼をさせてくれ。……いや、なんならすぐそこでお茶でも、」  
「あの、モモン様！」

それとなく2人きりになれるよう誘導するはすが、誰かに呼び止められた。少し不機  
嫌になりながらも振り返ると、頬を染めた幾人かの女性。他にも気がついたらやけに興  
奮した人間に取り囮まれていた。

(は？)

「とてもカッコよかつたですモモン様！ 握手して下さい！」

「流石、王国3番目のアダマンタイト級冒険者！ アイツら殴つてくれてスカッとした  
ぜ！」

「えつ、あつ、す、少し待つてくれ、いま取り込み中で——ん？」

モモンを賞賛する人だからに押されながら、クローネの方を見ると跡形もなく姿が消  
えていた。辺りを見渡していても目の届く範囲にはいない。

娘を連れ戻す千載一遇のチャンスを逃したことにワナワナと震え、無意識に〈伝言〉を  
繋いだ。

(な……な……ナーベラル———ツ!!)

『!? も、モモンガ様!』

裏路地に連れ込んだチンピラをボコボコにしていたナーベラルは、縋るようなモモンガの声に驚いて声を上げた。

——モモンガがナーベラルに助けを求めていた頃、入り組んだ路地をクローネは女に手を引かれて走っていた。程なくして歩きに切り替え、女は来た道を警戒するように睨みつける。

「ね、ねえ、クレア、どうしたの? いきなり走り出して、まだ話が途中だつたのに」

クレアと呼ばれた、長い金髪と目元を隠す布製のバイザーが目立つ女。

その正体は生活魔法で髪を伸ばし、クローネの魔法で武装を変えたクレマンティーヌだつた。露出の激しさは変わらなかつたのでマントは着ている。

「あの黒いフルプレート、クロちゃんのことナンパしようとしてたでしょ。  
お茶とか言つてなにするつもりなんだか、口リコンのド変態にわざわざ付きやつてる必要ないよ」

「ろりこん? なんば?」

知らないとはいゝ、本人が聞いていたら憤死する程の凄まじい勘違いが生まれていた。

「さ。せつかく1ヶ月ぶりに外へ出たんだし、婆さんにお土産買ってから帰る」  
「う、うん……」

(そんな変な人には見えなかつたけど……また会えるかな、モモンさん)

後ろ髪を引かれる思いでクローネは来た道を振り返りながら、クレマンティーヌに肩を押されて歩いた。



「クローネ様の搜索は断られましたか」

『はい、守護者に限らず下僕は与えられた務めに専念するように、との事でした。  
セバス様も接触を避けるために外出は最小限にと』

「…………」

『デミウルゴス様?』

「ああ、なんでもありません。モモンガ様はどうしてますか?」

『いまは宿のお部屋でお休みになられています。しばらくしたら一旦ナザリックへお戻りになるかと。リザードマンの件もありますから』

「分かりました、それはアルベドにも伝えて下さい。

……すまないねナーベラル、コソコソとこんな真似をさせてしまつて

『いえ、私も思いは同じですから』

「助かるよ、また何かあつたら連絡してくれ

『はい』

「…………やはり、そうなのですか、モモンガ様」

私室で一人呟くデミウルゴス。モモンガの指示に彼は何を思ったのか。  
その答えは、炎の中にあつた。

## カルミアを飾る茶会

昼過ぎ。いつもより遅く身支度を終えたガゼフはリビングの食卓でクローネを待つていた。

向かいには茶を飲んで寛ぎ、長くなつた髪をいじるクレマンティーヌ。

「別にあたしが送つていけばいいんだから、アンタは先に仕事行つたら？」

「今日は王に許しをもらつてゐる。

それにお前、そうやすやすと出歩ける身分ではない事を忘れてるだろう

「1ヶ月も家に籠もつてムさい顔見続けてたら息が詰まるつづーの」

「悪かつたな、生まれつきだ。俺もお前の顔は見飽きてる」

「こんな美女連れ込んで贅沢なヤツ」

「変な事を言うな気色悪い」

出会つてから1ヶ月あまり、2人の仲は変わりなくこの調子だつた。

その度に挟まれたクローネが縮こまり、呆れたゲルダに説教されてからここまで落ち着いた。

今日もまたいがみ合っていると奥の洗面所に繋がるドアが開く。

「おまたせガゼフさん！ ごめんなさい、遅れちゃつて」

「ああ、気にしなくていい——」

着替えを終えたクローネがリビングに入つてくる。

胸元から肩にかけて白い折返しが目立つ紺色のロングドレスを身にまとい、短い白髪の右サイドを耳にかけ、青いバラを模した髪飾りで止めている。全体的に青で統一された装いは瞳の赤がよく映え、清楚でありながら何処か目を引くコーディネートだつた。

出会つた時に着ていた黒いドレスとはまた違い、昼の空によく似合う。

「へー！ 似合うじやんクロちゃん、可愛いよ」

「えへへ、オシャレしちゃつた」

クローネを褒めながら、固まつたままのガゼフの脇腹をクレマンティーヌが肘で突く。

ハツとしたガゼフが慌てて声をかけた。

「あ、ああ！ まだ時間はあるから大丈夫だ！ ……その、とてもよく似合つている」

「おばあちゃんに選んでもらつたの。このドレス可愛いよね」

可愛いのは君だ。ガゼフはそう思つたが、口にするのはなんだか妙に恥ずかしかつたのでただ頷く。せつかく譲つてやつたのに気が利かない朴念仁にクレマンティーヌは

小さく舌打ちし、つまらなそうに頬杖をついた。

「夕飯の前には帰ってきてよねー、あたしは芋の皮むきぐらいしか手伝えないし」「うん、おばあちゃんのことよろしくね」

「はいはい、任せて。ま、熊のエスコートじゃ無事にたどり着けるか怪しいけど」

「クレマンティーヌちゃん?」

「あ、なんでもないっす。行つてらっしゃい戦士長サマ」

説教される時は2人一緒だが、今回は運悪くガゼフへの悪口だけが耳に入つてしまつた。洗面所から顔を出したゲルダに凄まれて手のひらを返す。家主に無遠慮な軽口を叩くクレマンティーヌにゲルダは人一倍厳しかった。

自分もズケズケ言つただけにガゼフは少し気の毒そうに見る。かと言つて自己申告する気はなかつたが。

「さて行こうか、クローネ。手を腕に」  
「う、うん」

差し出されたガゼフのがつしりとした腕にクローネが手を添え、2人は王城へと向かつた。



「第7位階がそれほどの大魔術とは……彼女がいなかつたら本当にお前を失っていたな」

ロ・レンテ城の一室。ランポッサは彫りの深い目元に影を落としてそう言つた。向かい側には机を挟んでガゼフとクローネが座つてゐる。

1ヶ月前にあつた謁見の後すぐガゼフとクローネはカルネ村での出来事を王に話すはずだつた。しかしクレマンティーヌの事があつたため、理由を付けて今日まで先延ばしにしていたのだ。

「此度の一件はすべて法国の謀<sup>はかりごと</sup>、決して陛下のせいでは」

「いいや、私が貴族達を抑え込めなかつたのが悪い。

たとえ敵わなかつたとしても出来る準備をさせ、それが叶わないのならお前を行かせるべきでは無かつた。愚かなことだ、これでは貴族たちを笑えんな」

「それは——」

結局、あの場でどう動こうとも貴族派閥を増長させるのだ。ガゼフが敗走すればそれ見たことかと<sup>あげつら</sup>論われ、ガゼフを守るために村人を切り捨てれば心なき王だと嘲笑を受けれる。

最善手は貴族達を抑え込んで至宝を装備させることだったが、それすらも計算に入れ

ていた法国の切り札を知つてしまえば詮無い話だ。ガゼフを失えば国力の衰えが加速し、バハルス帝国の侵攻を許す。

「たとえ陛下に落ち度があつたとしても、それは貴方の劍である私にも責があります。

それに、王国の民が虐げられていると知つて、黙つて見過ごすのは本意ではないでしよう」

「そうだな……そうなのだが……」

ランポツサはガゼフを切り捨てることも、民を切り捨てることも出来ない王だ。優柔不斷だと誰が罵ろうが、ガゼフはそんな王の愚かしいまでの優しさを尊び、慕つてゐる。そしてまた王も、不明を知りながら臣下として忠誠を誓うガゼフを心から信頼し、信じて討伐へと送り込んだのだ。

「国王様と戦士長様は、おもんばかお互いを慮つておられるのですね」

空気を読んだのか読まなかつたのか、2人を見比べたクローネはそう言つた。それを聞いたランポツサとガゼフが顔見合させて笑う。

「ははは。本当によく出来た御子だ、そなたは」

「そうあれと望まれたので」

「随分と不思議なことを言う。望まれた通りに振る舞えるのはそなたの才能ではないか」

小さく笑つてお辞儀をする姿はやはり堂に入つたものだ。

クローネの茶目つ氣はランポッサの心を軽くさせ、自分が1人ではないことを思い出させた。

「陛下、ご歎談中失礼します。ラナー王女殿下がクローネ様をお呼びです」

扉越しに兵士が呼ぶ声がかかり、ランポッサが約束の時間が来たことを知る。

「もうそんな時間か。

クローネ、今日は話が出来てよかつた。ラナーとは歳が近い、良かつたら仲良くしてやつてくれ。夕刻には戦士長を迎えてやろう

「ありがとうございます、国王陛下」

ランポッサと握手した後、兵士に案内されながらクローネは部屋を後にした。

「ご機嫌よう、クローネちゃん。直接お会いするのは1ヶ月ぶりですね！」

「はい！ お久しぶりです、ラナー様」

部屋に入るとなーが立ち上がりつてクローネに駆け寄つてくる。

謁見の後、使者から手紙を渡され、クローネはゲルダに代筆してもらいながら、2人は文通を重ねていた。その時にラナーから今のように呼んでもいいかと聞かれたのだ。挨拶を済ませると手を引かれ、席へと案内される。そこには大きめの丸テーブルを囲

むように見知らぬ5人が座っていた。

「魔法を使える友達がいると言つたのを覚えてますか？ こちらは私の友達、ラキュー  
スと彼女がリーダーを務めている冒険者チーム“蒼の薔薇”的皆さんです」

ラナーの左隣に座つたクローネに、同じくラナーの右隣に座つていて女性が自己紹介  
をする。

「初めまして、私はラキース・アルベイン・デイル・アインドラ。ラキースと呼んで  
頂戴」

ラキースと名乗つた女性は、ラナーやクレマンティーヌとはまた違う<sup>はつらつ</sup>澁刺とした金  
髪の美女だ。

「蒼の薔薇のメンバーは私から紹介するわね。

左からガガーラン、イビルアイ、ティナ、ティ―――ん？」

紹介された順からクローネにそれぞれ挨拶をし、最後のメンバーを紹介しようとした  
時、席から本人が消えていた。ハツとしたラキースがクローネの方を見ると、忍者装  
束の小柄な女性がクローネの手を胸に抱き込むように握っている。手を握られたク  
ローネはパチパチと目をしばたかせた。

「私はティア。アダマンタイト級冒険者、独身、女。大人になるまで養うから一緒に暮ら  
そう。女同士でしか出来ないこと、全て教える」

「へ？」

「ティア！ あなた約束忘れたの!?」

こうなることを予想してわざわざ自分の隣に座らせて約束までさせたのに、出会つて数分も立たないうちに破るとは何事か。ラキュースは机に手をついて立ち上がった。

普段鬼ボス鬼リーダーと呼んでいる彼女からスッと目を逸し、ティアは言い訳をする。

「こんなに可愛いなんて聞いてない」

「駄目よ、ガガーラン！」

「はいよ」

あああと首根っこを掴まれながらジタバタ暴れるティアを無視して、ガガーランはラキュースの隣の席へ落とす。いつものポーカーフェイスを心なしかしょんぼりとさせながらティアはおとなしく席へ座つた。

王国が誇る蒼の薔薇のメンバーであり青い方の忍、ティアは生粋のレズ。クローネはどうやらそのお眼鏡に適つたようだ。

「ごめんなさい、うちのメンバーが失礼を。彼女がティア、ティナとは姉妹よ」「はい、えつと、よろしくお願ひしますティアさん」

「……よろしく」

あまり気にしてなさそうなクローネを見て、ラキュースはホッと息を吐く。

一波乱あつたが無事に自己紹介を終えた。

「話には聞いてたけど、その歳で第4位階の使い手だなんて凄いわ。将来が楽しみね」「わたしなんてそんな……まだまだです」

「謙虚だな。謙虚なのは良いことだ」

「へえ、お前が褒めるなんて珍しいな」

「私をなんだと思ってるんだ、誰かを褒めることぐらいある」

口を挟んだのはイビルアイ。真紅のマントで身を包んで顔を隠す彼女は魔力系魔法詠唱者。少し気難しい性分だが、人間の中では一流以上の力量を持ちながら才能に驕らないクローネを素直に褒めた。

実際は第10位階の使い手なので、この場の誰よりも神がかつた魔法詠唱者なのだ  
が、表向きには第4位階の信仰系魔法詠唱者ということで通している。

ちなみにカルネ村で第7位階の天使と対決したことは伏せられており、あの場にいた貴族達にしか知らされていない秘匿情報として箇口令が敷かれている。なのでクローネは王国戦士長と六色聖典の戦いに助力した魔法詠唱者ということになつてた。  
(そういえばラナー様はこのこと知つてるのかな、聞かれたことはないけど)  
「なあ、冒険者にはならないのか？」  
旅してんだろう？」

「え、ああ、はい、王国から出るときは登録しようかなと思つてゐんですけど」

「『王国の白き冒險者』つてところかしら。うん、いい響きじゃない?」

「だ、駄目です! クローネちゃんは王国の客将なんですから!」

ラナーが焦ったように声を上げ、ラキユースは珍しそうに見た。

「まあ、ご執心ね」

「私の数少ないお友達です、ラキユースにはあげません」

「意地悪言わないでよラナー。悪かつたわ、この話は終わりね」

「むー」

頬を可愛らしく膨らませ、腕を組んでそっぽを向くラナー。すると脇に置いたワゴンが目に入つた。

「あつ! 忘れるところでした。クローネちゃん、これをどうぞ」

ラナーがワゴンから出したのは黒い焼き菓子。形は円柱で、てっぺんから下にかけて均等に溝が入り、上から見ると花を模つてているように見える。

「あら、カヌレね」

蒼の薔薇の面々の前にも出され、ラキユースが菓子に気付いた。

「実はお兄様がクローネちゃんが来るつて聞いて用意してくれたんです。」

前回は挨拶もせずに失礼した、つて言つてました。今日は用事があつて来られないそ

うなので」

「そだつたんですか、挨拶はわたしも出来なかつたのに……」

話を聞いた後、早速フォークで一口大に切り、口へ運ぶ。黒い見た目に反して中は卵色でもちもちとした食感だ。甘くて紅茶と合わせると丁度いい。

「わあ、美味しい。ザナツク王子にお礼をお伝えして頂けますか？」

「はい、伝えておきますね。うふふ」

何やら楽しそうなラナーにピンときたラキユース。ザナツクが差し入れを持たせるなんて自分が知る限り初めてのことだ。

「ね、クローネは好い人とかいる？ ちなみにラナーはいるわよ」

「それは是非知りたい」

ラキユースの隣でティアが前のめりになり、流れで暴露されたラナーが頬を染める。想い人のクラームは別件で席を外してたのは幸いだつた。

首を傾げるクローネに「好い人」とは「恋人」であることを教える。

「えつ！ そ、そんな人いません！ わたし、まだ子供ですし」

「年齢なんて関係ない」

「そいつは同感。好きなやつがいないなら、好きなタイプはどうだ？」

ショタコンであるティナも口を挟み、童貞食いのガガーランも乗つてくる。

2人とも肉欲優先であり血気盛んな冒険者だが、人並みには恋愛話に興味があつた。

「好きなタイプ……うーん、人間でもモンスターでも別に……」

「マジか。いやそういうタイプじゃない、性格とかさ」

「性格、ですか」

ガガーランにツツコまれてぼんやりと浮かんでくる理想のタイプを口にする。

「わたしは与えられてばかりだったので、わたしがした事を喜んでくれる人がいいです。ご飯を作つたら美味しいって褒めてくれたり、頑張つたら大きい手で撫でてくれたら……嬉しいかな」

途端にニヤニヤしだした蒼の薔薇の4人を尻目に、ラナーは真顔になつた。

1ヶ月前に廊下でクローネの頭を撫でていたのは誰だつたか。そして手紙に書いてあつた通りなら今居る家で料理を作つていたはず、それを食べたであろう人物。

本人は無自覚なようだが思い至つたラナーは「あ、これ無理筋だわ」と察し、目的のために応援するつもりだつたザナックの恋をポイっと心のくずかごに投げ入れた。

「恋愛などくだらん」

「うるさいぞ処女」

「処ツツ、お前！ ティア！」

恋話を鼻で笑つたイビルアイ。彼女が運命の恋に落ちるのも、そう遠くない……のか

も？



「ふう」

夜。クライムにおやすみを言つて見送り、ラナーは自室で蠅燭を付けた。

「計算が狂っちゃつたわ、でもお兄様の妾にするより手間は省けるかしら」

昼間のクローネの様子を思い出す。

想い人の存在を否定した彼女はまだ無自覚だが、切っ掛けがあれば気付くだろうか。

幸い相手は王族でもなければ爵位すら持っていない。役職は立派だがそれだけだ。

たかだか支援魔法を使つた程度で神話の存在を相手に、軽微な損傷で済ませた魔法詠唱者。

ガゼフ・ストロノーフが死んで帝国に吸收される道が遠ざかつた今、ラナーの安寧には彼女が必要だ。

一見すれば即戦力となりうる人材ではないが、騎士が最上位の誉れとされている王国で、絶大な力を持つ魔法詠唱者を客将に迎えたとしたら、まず間違いなく貴族からの反発があるだろう。

大前提として、御しきれぬ身元不明で強力な魔法の使い手など王国の体制では手に余る。

だが、剣の切れ味を増す研石であつたなら、それを使わない戦士がいるだろうか？  
なにより支援や回復に特化して、王の直属に恩を売れたのが素晴らしい。

どちらが欠けていても貴族を黙らせるることは出来なかつた。

王の信頼を得てもガゼフの優位は動かないし、領分を弁えている性格だつたのもいい。

貴族派閥も権力争いの邪魔にならないなら戦力として、もしくは王を糾弾する材料として利用するつもりだろう。

彼女の行動はそのまま王国内で魔法詠唱者の地位の向上に繋がつた。

この調子で功績を重ねていけば、彼女を中心にして神殿勢力を拡大し、王国の健康水準を上げることも出来る。今まで不遇だつた魔術師組合も注目を集めんだろう。

実際はどの程度まで魔法を使えるのかは知らないが、おおよその予想はついてる。あまり詮索しては警戒されるし、あれは鈍感だが見た目よりも頭がいい。父を通して動かしたレエブン侯もそれは心得ているはず。必要なのは功績と地位、名声、そして彼女の定住だ。

まずは機嫌をとつて情を湧かせ、禿鷹共も認めざるを得ない功績を積ませる。王国初

の宮廷魔術師へ正式に登用し、更にガゼフと婚姻すれば王国を守る象徴としても十分。2人の才能を継ぐ子供が出来れば万々歳。

まだラナーの頭の中にしかないが、上手くいけば確実に王国の未来は変わるだろう。「お父様に聞いた時はどうなることかと思つたけど、なんとか上手くやれそう。別に失敗しても良いのだけれどプランは多いほうがいいものね」

蠟燭の火がゆらゆらと揺れ、ラナーの顔を照らす。

しかしその光はラナーの瞳を輝かせはしない。

この石ころのような瞳を宝石に変えるのは、ただ一人だけ。

「待つててね、クライム。貴方と私が幸せになるのはもう少しだから」

そう言つてラナーは美しい顔に亀裂が走つたような、歪んだ笑みを浮かべた。

「あ、お兄様にはなんて言おうかしら。  
…………ま、いつか」

# ゲヘナ I 誘拐

「ふーん、そういうこと。クロちゃんといいアイツといい、拾い物すんの好きだよねえ」「それ拾われた側が言う?」

ラナーとのお茶会から更に1ヶ月後の初秋、夕方。

市場でゲルダから頼まれたおつかいを済ませながら、今朝エ・ランテルから戻ってきたクレマンティーヌに、ブレイン・アングラウスという男について話していた。

2日前にガゼフが仕事帰りに連れてきた時は酷く憔悴していたが、クレマンティーヌが帰ってきた頃には出かけられるほどにまで回復した。本人から話を聞いたガゼフによればまだ本調子ではないそうなのだが。

「あら怒つた? 最近人って、虐めてないから溜まってるのかなー、クロちゃんの頬つべじゃ発散出来ないか流石に」

「らつたら、ほっぺれあそばないれ」

肉屋の前で品物を包んでもらっている間、むにむにびよーんと人の頬で遊び始める。協力関係を結んだ時にした『人を無闇に殺さない』約束をちゃんと守っているらし

く、最近ガゼフと口喧嘩することが多い。口ではやめてと言いつつ気が済むまで好きにさせた。

「ところで家の方は大丈夫なの？　いま婆さんしか居ないけど」「うん、むしろあの家に居るほうが安全だよ」

クローネは揉みしだかれた頬をさすり、微笑ましそうに見ていた店主から品物を受け取つて歩き始める。

「あの家には『守りの秘文』<sup>（グリフ・オブ・ウォード）</sup>をかけてるから、教えた合言葉を言わないと魔法が発動して動けなくなるんだ。それに『お守り』も渡してあるし」

「お守りって、これ？」

クレマンティーヌはエ・ランテルへ出掛ける前に渡されたお守りを取り出した。

このお守りは『加速のタリスマン』。名前の通り『加速』<sup>（イースト）</sup>が込められている。

単独で情報収集をする彼女がピンチになつた時に離脱できるよう渡したマジックアイテムだ。

クローネがモモンガに外へ連れ回される際にごそつと渡されたアイテムのうちの一

つである。

「それとは少し違うんだけど……あつ！」

「ん？」

「パン買うの忘れてた、戻らなきや」

そのまま帰ろうとしたが、途中で買い忘れた物があつたのを思い出した。引き返そうとするとクレマンティーヌに止められる。

「いつものパン屋でしょ、あたしが行つてくるよ。クロちゃんはここで荷物見てて」「うん、分かった」

持つてた荷物とメモを交換して早足で歩いていつた後ろ姿を見送り、道端に避けた。

最近来たブレインを抜かせば4人暮らしのガゼフ家は戦士2人、育ちざかり1人（本当はアンデッドなので成長しないが人化をしているとお腹が空く）と食料の消費がそれなりに激しい。買い物するのも一苦労である。

ぼんやり人混みを眺めて待つっていた時。突然ビーツ！ビーツ！とアラームが頭の中でけたたましく響いた。

クローネは目を見開いて硬直する。家にかけていた探知魔法。防御魔法が破られた時のみ発動するそれに血の気が引いた。

「クリフ・オブ・ウォーディング」は盗賊などの知覚スキルで探知でき、専門スキルを成功させないと解除できない複雑な魔法トラップ。ユグドラシルでは足止めになるかも怪しいが、侵入者に対して第3位階の魔法を発動するのでここでは十分強力だ。

それが指すのは、いま家にそれを解除できるレベルの敵がいるということだった。

「クレツ、クレア！」

クレマンティーヌはパン屋へ向かっている。この人混みをかき分けて合流するのは時間がかかり過ぎる。その間に、ゲルダにもしもの事があつたら――

「おばあちゃん……！」

最悪を想像したクローネは居ても経つても居られず、震えそうになる身体を押さえ込んで テレポートーション でガゼフ家へ飛んだ。



「おやおや、随分と早いお帰りで。クローネさんとお呼びしても？」

「……、貴方は」

「私はサキュロント、六腕の一人ですよ」

「飛んだ先に居たのは緑のフードを被り、口に傷がある軽装の男。盗賊に見えなくもない。」

その男の後ろで、数人の部下らしき人間の一人が、ゲルダにナイフを突きつけていた。クローネは丸い目を釣り上げて男を睨む。

「おばあちゃんを、離して下さい」

「それは出来ない相談ですね。ああ、魔法は使わないでくださいよ、眠らされようが麻痺しようが、詠唱の間にナイフを引くぐらいならできますからね」

ゲルダのシワが寄る首にナイフが食い込んだのを見て、腰に下げた装飾剣から手を離した。

「目的はなんですか」

「もちろん貴女です。黙つて攫われて頂けるのならこの老人に手は出しません」

「クローネちゃん！　いいのよ、私の事は……！」

「おっと、無駄話を許すつもりはない。迷うなら舌を切り落として見せましょか」

「その必要はありません、行きます」

即答したクローネにサキユロントは氣味の悪い笑みを浮かべて手を叩く。魔法詠唱者でも所詮は子供。祖母を人質にとられ、健気な自己犠牲を見せた少女に皮肉と侮りを交えて称賛した。

「ただし、わたしのことは貴方が連れて行つてください」

「ご指名とあらば喜んで」

淑女の誘いを受けた紳士のように、わざとらしいお辞儀をしてみせたのをクローネは冷ややかな目で見つめた。

六腕——アダマンタイト級冒険者に匹敵する犯罪者集団の存在は、王都で暮らす事が

決まつた時にガゼフから教えてもらつた。その名前を堂々と名乗つたのなら、それを聞いていたゲルダを生かして返す気などハナからないのだろう。

サキユロントを指名したのは確実にこの場から引き離すためだ。

先程の口ぶりから察するに、第4位階の使い手という情報を得て人質を取ることを選択している。クローネだけを警戒しているなら実力者らしきこの男さえ居なくなれば、ゲルダは相手が油断した隙に”お守り”を使って逃げられるはずだ。

今のクローネは『人化の指輪』の効果でアンデッドの特殊能力を失っている。

指輪を入れ替えて精神作用と即死だけはレジストできるようにしてあるが、そうでなくとも上位無効スキルを持つクローネは攫われてもそう簡単には死ない。

見る度に感じる怒りを、目を閉じることで鎮め、今できる一番穏やかな表情を浮かべる。

どうか、ぎこちなくありませんようにと祈りを込めて。

「おばあちゃん、絶対に反撃しようとしちゃ駄目だよ、振り返らずにすぐ逃げてね」

「クローネちゃん……」

ゲルダを心配させないよう、そう言つて〈睡眠〉<sup>(スリープ)</sup>で眠らされた。

脱力したクローネを肩に担いでサキユロントは玄関を開ける。

「このまま本部へ戻る、ババアは他所に連れて行つて始末しろ。痕跡は残すなよ」

「分かりました、サキュロントさん」

玄関が閉まり足音が遠ざかっていく。

任された部下達は解放されて床に座り込んだ獲物をニヤついた笑みで見下ろした。どう殺してやろうかと考える獣の目だ。

ゲルダは胸元に下げた“お守り”を怒りと恐怖で震えながら握りしめた。

ここで死んでしまったならクローネは自分を責める。しかし連れて行かれるのをただ見ていることしか出来ないなんて。覚悟はしていたが無力な自分が情けなかつた。

(絶対に、絶対にクレマンティーヌちゃんと戦士長様に伝えるから、どうか無事で居てちょうだい……)

クローネが最後に言つたことを守ろうと、扉の方を見て——ゲルダは意識を失つた。

「ん？ 寝たぞこの婆さん」

「ははは！」

まだ何もしてねえのに氣い失つたのガ——

「は？」

部下たちは目の前で同僚の首がズルリと落ちたのを見た。断面から吹き出した血が顔にかかり驚いて後ずさる。

「誰か、誰か他にいるのか!?　おい、あガツ——

「な、なんだ！　おい、何がおきて、ひギツ——

次々と首が飛んでいく。倒れ込んだゲルダの頬にも血がかかり、ビチャビチャと床が真紅に染まる。

残つた一人が腰を抜かして尻餅をつき、怯えながら周囲を見渡した。すると、たまたま目に入つた天井に何かがゆらりと姿を現す。

最後に見たのは、緑色の光と、刃のような虫の脚。



クローネ誘拐から30分後、場所は変わりロ・レンテ城。

ラナーに呼び出されたガゼフは用事を済ませて城壁に面した道を歩いていた。

今日は八本指の拠点を襲撃するための話し合いがある日だ。レエブン侯も参加すると聞いて気は進まなかつたが、王国に巢食う犯罪組織を壊滅させるまたとない機会。好き嫌いで決めて良いことではない。

ふと、嫌な視線を感じ、足を止めると目の前にステイレットが突き刺さる。飛んできた方を確認したガゼフの視界に見覚えのあるマントがチラついた。ステイレットを拾つてそちらに足を進める。

「お前、どうやつて入った」

「そりや入れたから入ったに決まつてゐるでしょ、兵士は誰も傷つけてないから安心しな」  
ガゼフがステイレットを投げて渡した相手はクレマンティース。悪びれる様子もなく王城に忍び込んだ彼女に眉間に抑えてため息をついた。

「そんなことよりクロちゃんが攫われたよ、婆さんを人質に取られてね」

「なッ」

妙に軽い調子で言われたクローネの誘拐。ガゼフはしばし絶句し、慌てて問い合わせる。

「お前がついていながら何故……！」

「一緒に買物してなんだけど、ちよつと目を離したら居なくなつててさ。帰つたら帰つたで婆さん倒れてるし血の匂いはするしでホント参っちゃう」

幸いにもゲルダは無事であり、帰ってきたブレインに任せってきたこと、そして誘拐された状況と犯人が六腕の一人“幻魔のサキユロント”であることを教えられた。

「六腕、いや八本指がクローネを攫つた？」 一体なにが目的で、

ステイレットを弄ぶクレマンティースに意味ありげな視線を投げかけられた。

「――― 法国か」

「多分ね。法国はやつていることがどうあれ悪の組織つて自分たちのことは思つてないし、人を食ひ物にしている連中に依頼するなんてやり方には少し引っかかるけど。自國

の客将に手え出す馬鹿はいないでしょ。

……それで、どうする？」

問い合わせられたガゼフは腕を組んで考える。

「まずは王都を封鎖して八本指の行動を制限する。王国の客将が攫われたなら八本指を襲撃する大義名分にもなるだろう。

「ゲルダが殺されなかつた状況も不可解だ、なるべく迅速に動く」

「あつそ。ま、そつちは勝手にやつてよ、あたしはあたしで動くからさ」

「おい」

「勘違いしないでくれる？ アンタには義理で伝えに来ただけ。

久しぶりにたつぱり遊べ そうな相手なんだから、邪魔したら先にアンタを殺しちゃう  
かもね』

振り返ったクレマンティースは笑っていたがバイザー越しでも伝わつてくる子供じみた殺意。拾われてからひた隠しにしていた残虐性をむき出しにしている。

クローネを抱き枕にして寝たり、ゲルダの説教を正座で聞く姿からは想像もできないが、彼女は確かに数々の冒險者を惨殺した連続的な快楽殺人者。

多少演技をしていたとしても、人の目玉を抉つて穴だらけにして何も感じず、弱者を踏みにじることで快感を得る女だ。

「冒険者を拷問するのも好きだけど、『自分は強いんだ!』『だから何をやつてもいいんだ!』って思つてゐる連中を、上から踏み潰すのも最高に笑えると思わない? どんな無様な悲鳴が聞けるのか楽しみでゾクゾクしちやう。」

——誰の物に手え出したのかじっくり教えてやらないとね』

今まで見せなかつた残酷さと垣間かいま見える怒り。ガゼフは不快そうに眉をしかめながら、ほんの少し共感した。クローネは誰のものでもないが言いたくなる気持ちは分かる。

クレマンティーヌが一度死亡して、力が衰えていたのは2ヶ月前の話。ガゼフとの鍛錬で元の力を取り戻した彼女は間違いなくこの王国で一番強い。認めるのは癪だが戦力としては心強かつた。自らの欲求を優先してしまわなか一抹の不安がよぎるが、時間も人手も足りない今は彼女の義理堅さを信じるしかない。

「分かった、もういい。人目は避けて隠密に徹しろ、まだお前を表に出すわけにはいかない

「アハ、そんなこと言つて止めないなんてアンタも相当怒つてるじゃん。すぐ助けに行けなくともどかしいねえ、ガゼフ・ストロノーフウ?」

「うるさい、行くならさつさと行け」

心底馬鹿にした顔で突いてきたので青筋を浮かべて虫を払うように追い払つた。

耳につくケラケラと笑う声が消え失せた頃、ガゼフもラナーの元へと急ぐ。マグマのように燃えたぎる怒りは一周回つて頭を冷静にさせる。ここまで頭に来たのはカルネ村以来だ。

必ず助け出す。

そう決意して、ガゼフは硬く拳を握りしめた。



「モモンガ様からお許しが頂けたので作戦を実行する、重要事項は忘れずに頼むよ」「とつくり頭に入れたであります！」

シャルティアに大声で返事をされたデミウルゴスは肩をすくめる。

情報収集に使っていた王都の館で、階層守護者のシャルティアとマーレ、ナーベを除いた戦闘メイド「プレア・デス」、そして執事長セバスが顔を合わせていた。

これから王都で起こす、とある作戦のために。

「それとセバスにソリュシャン、現地についてからの道案内には、お借りしたエイトエッジ・アサシン八肢刀の暗殺蟲に任せてある。交代したらモモンガ様の警護に戻すから、あまり手間をかけないように。役目が終わつたらすぐにナザリックへと帰還してくれ」

「分かりました」

「かしこまりました、デミウルゴス様」

了承した2人に頷いたデミウルゴスは、ゆっくりと参加した全員の顔を見渡す。「皆、分かつてていると思うが作戦の一部はモモンガ様に伏せてある。

今日まで協力してくれて心から感謝する、後のことばは私に任せてくれ。

君たちはデミウルゴスに騙されたとでも言つてくれれば、それでいい

先程までキビキビと作戦内容を説明していた姿とは打つて変わり、弱々しい物言いだつた。何かを背負っているような、後ろめたいような。いつも姿勢の良い立ち姿もどこか力を感じられない。

それを見かねたプレア・デスのリーダー代理、ユリが心配そうに言葉をかける。

「デミウルゴス様、それはあまりにも自己犠牲が過ぎます。

私共は至高の御方に仕える者として、その意志に賛同しました。罰を受けるなら『一緒します』

「……ありがとう、ユリ」

礼を言われたユリが目礼をする隣で、シャルティアが首をかしげる。

「？ なんの話でありんすか？」

「すまないね、こちらの話だ。君は本当に何も知らないから私がから伝えておくよ」

「??」

「ますますよく分からなくなつたシャルティアに、少し笑つたデミウルゴスは気を取り直してナザリックの指揮官らしく胸を張つた。

「今回の作戦で、モモンガ様に我々が役に立つことを証明しなくてはならない。ナザリックのため、モモンガ様のため、そしてクローネ様の安全のためにも。失敗は許されない。逆に、全てのミスを帳消しにするような結果を、お見せするのだ」並々ならぬ意気込みに、その場に集つた者たちも力強く頷く。

王都リ・エステイーゼに帳が落ちる。長い長い一夜が始まつた。

## ゲヘナII 疾風走破 対 鋼の執事

暗い夜道に身を隠すかのように、クライムは静かに走っていた。

隣には天才剣士ブレイン・アングラウスと、レエブン侯の私兵ロツクマイア―が並走している。

ラナーとラキュースが主導する巨大犯罪組織「八本指」の壊滅作戦。

当初はもう少し準備に時間をかけるはずだったが、急遽予定を早めて実行に移された。

クライムも実行部隊として斥候及び制圧の任務を与えられている。

走りながら見送りを受けた時の事を思い出す。

ラナーはいつも通りの微笑みを浮かながら、どこか顔色が悪く怯えているようにも見えた。

身を寄せられてそれどころではなくなったが、あれはクライムへの心配だけではなさうだつた。

無理もない、攫われたクローネはラナーの数少ない友人であり、王城に来られなくて

も手紙を送つて交友を深めるほどだ。そんな友人が攫われてあの心優しい姫様が平氣でいられるはずがない。

一刻も早くラナーの宝石のような笑顔を取り戻すべく、決意を固める。

そして八本指の拠点に到着したクライム達は、門の前に人影を見つけた。

黒い執事服の屈強な老人。

彼は黙つて門を睨みつけるように見上げていた。



八本指の拠点である館の廊下を、一人の男が歩いていた。

男の名はエドマン。太めの体型に整えたブラウンのおかっぱと口髭に、タレた糸目。見た目だけならば温厚そうな男だが、彼は貴族派閥の傘下として名を連ねているそこそこ力のある貴族。

見た目とは裏腹に野心家であり、八本指のスponサーとして金を出しているのもその一環だ。

そんなエドマンのもとにある日、法国から使者が送られてきた。

「カルネ村でガゼフ・ストロノーフに加勢した魔法詠唱者の情報を流してほしい」と。

報酬がそれなりの額だつたこともあり、宫廷会議に参加した貴族を酔わせて聞き出した内容をそのまま伝えたエドマンは、法国とのパイプを利用できないかと考えた。

内通者としてより高い地位に食い込むための支援を受ければ成り上がることもできる。仮に戦争状態になつても早いうちに信頼を得て恩を売ればそれなりの待遇は約束されるだろう。金も入つて一石二鳥だ。

祖国を売り払う悪魔じみた企み。そこで目をつけたのがクローネだつた。

法国には「スカウトはこちらでやる」と断られたが、手間を省けるならばそれに越したことはないだろう。気前よく差し出してやれば取引も有利に運べるというもの。

なんでも魔法詠唱者らしいが所詮は少女、人質をとつてしまえばなんのこともない至極簡単な仕事。

廊下を歩いて牢屋代わりの一室にたどり着く。

見張りが居ないのは気になるが、そんなことよりも今はこの部屋の中に用がある。

エドマンは興奮で震える手をドアノブにかけた。

月明かりが差し込む一室。お目当ての少女がベッドに横たわっている。

鎧を剥ぎ取られ、簡素なワンピース姿で眠る可憐な少女。

「おお……これは素晴らしい……」

エドマンにとつて唯一誤算があつたとすればクローネの外見を知らなかつたことだ。

少女であり珍しい色を持つとは聞いていたが、詳しい容姿は知らなかつた。

(法国への土産でなければ屋敷で困つてやつたものを。実に惜しい。

気に入つていたあいつも売つて、なかなか好みの女を見つからなかつたというのに)  
するりと撫でた頬と細い首筋にゴクリと喉が動く。

(ああ、ひと思いに散らしてしまいたい!)

エドマンにとつて美しい少女とは蓄だ。

どんなに美しく花開くのか、輝かしい将来を感じさせる蓄。

それが咲く前に無理矢理開かせるのがどうしようもなく好きだつた。

普通に生きていれば村でほそぼそと暮らし、夫を得て子供を作る。

その幸せな未来を取り上げ、己の下で快樂で喘がせるのがたまらない。

美しい少女が涙を拭う手で男を悦ばせる光景のなんと甘美なことか。

心を手折つても身体は成長するので、飽きたら売り払えば金にもなる。

そして目の前にいる少女は、気高く咲くのか可憐に咲くのか、無数の可能性を感じさせるあどけなさ。まさにエドマンにとつてこれ以上にない逸材だつた。  
(引き渡す前に少し楽しんでも良かろう。どうせ朝になれば法国へ送り込んでしまうの  
だから、その前に味見だけでも……)

鼻息荒くベッドに乗り上げ、クローネに覆いかぶさる。

その芳しい首筋に舌を這わせようとして――

「随分と楽しそうですね」

背後から突然声をかけられ驚いて振り返った。そこには執事服姿の見慣れぬ老人。邪魔したことにして文句を言おうとしたが、強い衝撃がエドマンを襲つた。

ベッドから転げ落ち、赤くなつた頬を押さえて自分を裏拳で殴つた相手をなじる。

「お、お前！ 私に、こ、こんなことをして許されると思つてはいるのか!?」

「それはこちらの台詞です」

黒く窪んだ片目から覗く赤い光。それにギロリと睨みつけられ、短く悲鳴を上げた。

「この御方はお前如きが触れていい存在ではない。

それもあるうことか身の程も弁えず、この方の身体で欲を満たそうとするとは……愚かな」

カツカツと革靴を鳴らしながら、クローネの父に仕えるナザリツクの執事長セバスチヤンは後ずさるエドマンに歩み寄り、壁に追い込んで蠅でも見るような目で見下ろした。

「私は拷問などはあまり好きではないのですが、たまには良いでしょう。

――樂に死ねると思わないで下さい」

そう言つてセバスは膨らんだ股座に向かつて勢いよく足を振り抜いた。

「———ツ!!!

セバスの怒りの込もつた蹴りは立ち上がった粗末なものを破裂させ、腰回りの骨の一切を粉碎する。気絶したくなるほど激痛にエドマンは声にならない叫び声をあげ、粉々になつた股を押さえながら白目を剥き、泡を吹く。

「今からそんな調子では大変ですよ。これはほんの小手調べ、あとは得意な者に任せる」としましよう」

床に突つ伏してピクピクと痙攣する物体から興味を失つたセバスは、穏やかな寝息を立てるクローネに脱いだ上着をかけ、そつと抱き上げた。

自分の腕の中にはすっぽりと収まる、あまりにも小さく尊い存在。自分たちがどんな思いで少女を守つているのか知りもせず薄汚い欲望のまま陵辱しようするなど。ただ殺してしまつては生ぬるい。

ナザリツクでも稳健派に位置するセバスだが、至高の存在の御息女であり嫁入り前の娘の素肌を触れようと下劣な存在を許すほど甘くもなければ優しくもない。

「すみません、八肢刀の暗殺蟲。仕事を奪つてしまつて」

「お気になさらず、私共では血で汚してしまつところでした」

声をかけられた黒い蜘蛛のモンスターがベッドの真上にゆらりと現れた。

この拠点には、セバス達が突入する前からクローネ警護の密命を帯びた

<sup>エイドエッジ・アサシン</sup>八肢刀の暗殺蟲の数体が潜入している。合流するまでクローネを守り、この拠点の物資を逃さずナザリックへ送るため加工する役目を負っていた。

しかし突入と同時にクローネの安全は確保したはずだが、よもやその警戒を搔い潜ることに一生分の運を使い果たす男が居るとは予想外だつた。

クローネの警護役と案内役は別だつたので、セバスが手を下さずとも首を跳ねられていただろうが居合わせたのが運の尽きだ。

男はそのまま放つておくよう伝え、任務を果たすため部屋を出る。

「ねえ、お爺さん、その子をどこに連れて行くのか教えてくれない？」

先を急ぐセバスの前に現れたのは目元を隠した金髪の女。

クローネを探しに来たクレマンティーヌが余裕そうに腕を組んで廊下にもたれかかつていた。

ガゼフと別れてから唯一人身売買が行われている娼婦館に殴り込み、居合わせた奴隸部門の顔役を半殺しにして、知つてゐる拠点の情報を洗いざらい吐かせたクレマンティーヌ。

そして情報を元に潜入した一つ目の拠点が大当たり。先程六腕の一人を拷問した時にクローネが居ることを知つて駆けつけたところだ。

「あたしはクレア。王国に雇われてる傭兵みたいなものなんだけど、お爺さんは？」  
「名乗るほどの者ではありません」

「つれないなあ、もしかして警戒してる？　あたしが王国に仕えているように見えないから。

それとも……お爺さんが王国側じやなかつたりするのかな、たとえば法国とか」「さて、貴女には関係のないことだと思いますが」

「いやいや、大アリだから聞いてるんだよ、勿体ぶるなら身体に聞くけど？」

ステイレットを抜き、殺意を言葉に乗せたクレマンティーヌは苛ついていた。

先程六腕のフルプレートを瞬殺し、レイピア使いの男を拷問して遊んでいたのだがさつさと死んでしまい、もつと痛めつけて自分がやつたことを後悔させてやりたかったのに期待外れも良いところだつた。

そこで鉢合わせたのが目の前にいる執事風の老人。

関与を疑っている法國は年功序列。老年であるなら諜報員だととしてもそれなりの地位に居るはずだが見覚えはない。ハツキリしない態度から察するに、八本指と繫がりがある貴族の召使いだろう。

身ぐるみを剥がされたクローネに上着をかけてやる程度の良心はあるようだが、所詮は命令で動く小間使い。クローネを見つける目的も果たせたので思い知らせるには丁

度いい相手だ。

「……私はいま機嫌が良くないのですが。向かってくるのなら手加減は出来ませんよ」「女だから手加減するとかそういうタイプなんだ、キュンときちやう。

あたしそういう奴の吠え面見るのだいい好き」

男を魅了する甘い声で囁きながらクレマンティーヌはマントの紐を解く。

下に隠れていたのは、白い肌によく映える、真紅の女性用軽鎧。

クローネが強化魔法（魔法の装束）マジック・エースメントをかけてくれた軽鎧は現在の最強装備。術者のレベルに応じて効果時間が引き伸ばされる魔法なのでまだまだ余裕がある。

鎧を見て目を細めたセバスは、抱えていたクローネを廊下に置かれた長椅子の上へ寝かせた。

「一応もう一回聞いておくけど、その子をどこに連れて行くのか言う気は本当に無い？」

「ええ

「あつそ。まあいいけ、どツ！」

まずは冷静ぶつた面の皮を剥いでから聞くことにしたクレマンティーヌは、猫のように体勢を低く構え、その健脚で離れていた距離を一足で詰めた。

反応せず棒立ちのセバスを完全に獲物だと認識した彼女は、残忍な笑みを浮かべ、バイザーの下で瞳孔を開く。そのまま容赦なく無防備な肩に凶刃を突き立てようとした。

ガキンツ

「は？」

まるで鉄を突いたような音と手応えにクレマンティーヌは真顔になつた。

どう見ても布製のシャツなのに金属鎧のような硬さでステイレットが通らない。

（武技も使つてる素振りがないし、魔法の力も感じられないのに。……まさか神の御物？　コイツただの執事じやないのか！？）

その一瞬の隙がセバスの反撃を許す。

「しまツ……〈不落要塞〉！」

ナザリツクでも随一を誇る、肉弾戦最強の一撃。

腰の入つたその強打がクレマンティーヌの顔に入つた。

セバスの拳はプレートで補強されたバイザーを割り、クレマンティーヌを廊下の奥へ吹き飛ばした。何度かバウンドした後、ゴロゴロと転がつて壁に激突する。

強化魔法がかかつた防具を破壊し武技を貫通するほどの威力。首から上が吹き飛ばなかつたのが不思議なくらいだった。何本か歯が折れ、切れた口の中から血が滴る。

「ぐッ……うッ……」

痛みのあまり床に這いつくばつて唸ることしかできない。

なんとか顔だけでも動かし、長い髪のスキマからセバスを見た。

「ほう、耐えますか。同じ攻撃を受けた六腕の2人はすぐに死んでしまったのですがね。ならばこれはどうですか？」

次の瞬間、クレマンティーヌの心臓は縮み上がった。

まるで凍てつく氷の洞窟に放り込まれたような、絶対零度の殺意。

室内なのに冷気が頬を叩いている気すらしてくる。

先程の一撃を放つたとは思えないほど相手は平静としている。

強者を自負する自分が死を予感した攻撃は、相手にとつてそうではなかつたのだ。

気迫と拳一つで戦意を喪失させるほど力量差。勝てるわけがない。

獲物はこちらの方だつたと心の底から理解した。

（冗談じやない！　また、また死ぬなんてごめんだ！）

クレマンティーヌにとつてクローネは命の恩人だが、それだけだ。

一度失つた命を救つてくれたことに感謝こそすれど喜んで命を捨てるほど入れ込んでいる訳じやない。

（この爺が法国と繋がつていようがもうどうでもいい、今すぐここから逃げたい！　いいじやないか逃げたつて、誰だつて死にたくないだろ！）

クレマンティーヌは震える手を動かし、這つても逃げようとすると、指になにかか

が当たつた。

(これ、クローネがくれた、お守り)

自分の身を案じたクローネに渡された逃走用のアイテム。

それを目にしたクレマンティーヌは我に返り、カチカチと鳴る歯を食いしばつた。

「……英雄の領域に、足を踏み込んだクレマンティーヌ様が……」

今にも恐怖で逃げ出したくなる身体を、プライドを投げ捨てた無様な自分への怒りで抑え込みながら、壁に手をついてゆっくり立ち上がる。

拾われてからの2ヶ月間、クローネはクレマンティーヌに困った顔をよく向けていた。

人殺しが好きだと言った時、ガゼフとの口喧嘩に挟まれた時、ちょっとした悪戯をされた時。

だが抱き枕にされてうなされても一緒に寝るのをやめなかつたし、クッキーを冒険者に渡してしまつた彼女に自分の分を分けてやつたら、はにかんで礼を言つてくれた。

これは、拾つてくれた少女のために改心するとか、そんな綺麗な感情ではない。

ありのままの自分を拒まなかつた少女にほんの少しだけ絆されただけだ。

「負けるはずがねえんだよッ!!

自分に言い聞かせるようそう叫び、『加速のタリスマン』を割る。

その上で重ねられるだけの武技を発動し、最後に最高峰の戦士たらしめる自分の異名の元になつた武技〈疾風走破〉を全身に纏つた。用意を終えたクレマンティーヌは再び体勢を低く構える。

ここまでやつても勝てる気がしなかつたがやるしかない。出来うる力の全てで、床を蹴つた。

——その速さはまさに疾風。

常人の目では捉えられず、ただ赤と金だけが過ぎ去つていく光景は風と呼ぶに相応しい。

クローネが受けた力と捨て身の攻勢が追い風となつて、クレマンティーヌを真なる疾風<sup>はや</sup>の如き戦士へと変える。

(防具に攻撃が通らないなら顔、反応する前に急所を突く！ それでも届かなかつたら……)

先を考えるのはやめた。

今はこの一突きに全身全霊を賭けるだけ。

「ツあああああ！」

狙うのは目。その先にある脳をも貫く勢いで、後ろに手を組むセバスめがけてステイレットを突き出した。

「狙いは良いのですが、残念でしたね。どれだけ素早くなつても私には見えます」

刺突攻撃が決まる寸前、セバスはステイレットを掴むことで止めた。  
この世界でしばしば神や賢者と呼ばれる存在と若干の違いはあれど出自を同じくするNPCと、生存競争に負け住処を追わされた人間種。少しバフを盛った程度では埋められない絶対的な差がそこにある。

クレマンティーヌの決死の一撃は届かなかつた。

「う…………あ…………」

傷一つ無い眼球に見下され、恐怖がぶり返したクレマンティーヌは得物を戻すことも出来ずカタカタと震える。

ブワリと広がる冷たい殺氣。下から突き上げられた拳を受けるしか無かつた。

「ふむ、心意気は及第点と言つたところですか」

床に倒れたクレマンティーヌを見下ろし、殺氣を引っ込めたセバスはそう呟くと、背後からソリュシャンに声をかけられる。

「セバス様、拠点の制圧が完了しました。巡回していたエイトエッジ・アサシン

エイトエッジ・アサシン

ンガ様の警護へ

「分かりました。ではあの部屋にいる人間は貴女が直接、真実の間へ送つて下さい。

そして加護を受けているこの女性はデミウルゴスに言つて保護を。

今は気絶していますが、クローネ様を探つていた今回の黒幕に心当たりがありそういうので

「かしこまりました」

クローネを抱き上げたセバスを見送り、ソリュシャンは髪で顔が隠れたクレマンティーヌを一瞥してから部屋に入る。

失神したエドマンの前に立ち、至高の存在に作られた美しい顔をグニヤリと歪めて喜んだ。



悪魔ヤルダバオト、襲来。

レエブン侯の依頼で王都に来たモモンガは、今回の作戦の詳細について聞くためヤルダバオト扮するデミウルゴスもろとも民家に突つ込んだ。

ヤルダバオト対モモンの激戦を演出する爆撃音が響く中、瓦礫をかき分け、指定され

た部屋の前にたどり着く。

扉を開けたモモンガを出迎えたのは、デミウルゴスの土下座姿だった。